71
489

始

71-489

庾六全集

第十八冊

12.1.22
內交

古外物侍
不之文字

天眼通、どこまで續きますかと或人に問はれて、著者の我これを知らずと答へしが、實際それに相違なし、たま〳〵書を披けば、梁の武帝、達磨に向うて曰く、朕に對するもの誰、磨云、不識、

斜月入前楹、迢々夜坐情、梧桐上階影、
蟋蟀近牀聲、曙傍窓間至、秋從簟上生、
感時因懐事、不寝到鷄鳴、

浪六全集

第拾八編

天眼通

浪六著

三百六十餘日の油斷大敵に攻めらるゝ大晦日と、萬里同風の喜びに新なる正月の元旦と、その相違は時計の針の秒たゞ一轉、

殷々と響く除夜の鐘の音は、鐘撞坊主が鐘樓の石段を上ると下るとの間にして、上る時は去年、下る時は今年、人生の苦樂また斯の如く紙一枚の裏表に等し、

監獄の横町に安樂の家庭あり、學校の裏門に人殺しないとも限らず、數人の醫學博士に

枕頭を圍まれて癒らぬ病人の借家住居に一合づゝの寢酒を天下の名藥として長命する達者老爺あり、墓原の隣りにも子は生れ、うれしい新婚旅行の寢臺に甘き戀の喃々を載せて走る汽車の下、悲しい夫婦別れの果てを身の置處なく轢死するものあり、

運命の神、あまり人間を馬鹿にして不平均に並べ過ぎたるやうなれど、これが社會の現在、大觀すれば小兒の玩具箱を引ッくり返せし如く、めちや〳〵の雜居紛亂せる世の中、貧富の懸隔また壁一重にあり、

その現在を實際の壁一重に隔てざれど、わづかに三間幅の道路一筋を隔てゝ大金持と素寒貧の睨み合ひ

ところは下谷の阪本町を千住方面に向うて右に折れし横町、昔の酒落一口に、恐れ入谷の鬼子母神といふ朝貌の名所、今は其風流を誇りし朝貌も、榮華一朝の夢と過ぎ、名高き鬼子母神の境内も、名さへ得知れぬ奴に追ひ詰められて、あるか無きかの哀れを止め、殆ど舊狀一變の新開地となりしが、五六年以前、この新開地に三尺の土を盛り上げ、要害堅固の煉瓦塀を廻らして、千坪以上の庭園に泉石の數奇を極め、まだ飽き足らず上野の森を手に取る如き大廈高樓を築き、道路の片側を全部占領せる中央に鐵柵石柱の大門を開き、いかめしき玄關構へに生存競爭の凱歌を揚げたる表札は、杉浦長藏の四字、

この杉浦家に向ひし片側は、まだ元のまゝ舊狀依然として古びたる長屋續きの一蓮託生、ずらりと軒を並べて睨み合へど、實は睨み合ひにあらず、いづれも榮養不良の眼力を失うて睨み返すほどの勢ひなく、年が年中、朝夕に睨み通されの貧乏人、わけて門前の眞正面に當れるは、その軒竝び中に第一の見苦しき弊屋、その日暮しの職工三人が相住居の自炊生活、

こゝを通行するものは必ず右と左の兩側を對照して、いづれ一方の長屋は遠からず買ひ潰さるべしとの衆口一致、實際また二三年以來この長屋一帶を杉浦家より頻りに買取の相談あれど、これほどの大金持を向ふに廻した長屋の持主、世間相場の十五倍以上を頑張ッて、福の神と首曳の料簡

されど長いものに卷かるゝ諺、いづれ最後は弱肉强食の世の中、もし賣買の相談こゝに成立するとすれば、杉浦家の著手は左右の煉瓦塀に面せる向側よりも、まづ差當りて出入の目觸りとなる門前の眞生面、まッ先に追ひ立てらるゝは例の職工三人、これを住居の不安より見れば、大砲の筒口に向へるが如し、

但し其日ぐらしの職工三人、あすの事は偖置き、一寸先の闇の夜に鼻唄を謠うて、泥溝板に彈ね返さるゝ脚下を苦にせず、人間萬事塞翁の馬の糞と心得、蛙の面に向ふ水の暢氣さ、

「金のある奴も吝だが、こんなボロ長屋を持ッて慾張る奴も分らないぜ、啞の喧嘩ぢやァあるまいし、賣るなり買ふなり雙方どッちか早く口を切れば宜いに」

「さうさ、家賃は滯ッても立退き料は几帳面に取ってやるからな、加之も巧く遣れば二重取だ、向ふの杉浦と家主の禿頭から」

三人の内、あとの一人は無言のまゝ壁に吊せし職工服を身に纏うて、破れ靴の紐を結びながら振り返り、

「金持も家持も他人で此方は癇癪持だ、はゝゝゝもかし癇癪の蟲を押へて四十錢の日給を取りに出るのも仕方がない、おい、もう時間だぜ、一足先へ行くよ」

兩方より手を伸ばせば其のまゝ繋がるべき僅の狹き道幅に向き合ひながら、飛んでも跳ねても及ばぬ貧富の懸隔、堂々たる杉浦家の大門より眞正面に猶更ら目立ちて見苦しき棟割長屋の三人、

三人中の大山長吉といふは今年二十五、その名に反いて五尺に足らぬ禿助、その姓にも反して骨と皮とに痩せこけたる小男、いはゆる貧弱の容貌を遺憾なく現はし、加之も左の目の下より鼻の脇に生來、べッたりと牡丹餅を押し潰せし如き黑痣ありて、もし昔の仇討ならば免れぬ證據、すぐに其場で遣られる奴、同じ職工仲間に痣長と呼ばれながら怒りもせず、おいと氣輕に振り向く工合、頗る好人物に出來た剽輕者、

また一人は吉岡定勝といふ、いかにも立派に仔細らしい名を持てど、何の仔細もなく考へもなく、ことし二十六の曉まで、のろ〳〵と無事に育ちしだけの男、たゞ色白に聊か滿足の目鼻立を自慢し歩いて、わづかの日給よりコスメチックを購ひ、動もすれば寢白粉も仕かねまじき奴、職工には惜しいと人の戯談を眞に受けて新俳優になりたいとは本人平生の希望なれど、無芸大食この上もない無遠慮の無器用もの、べら〳〵と圖に乗ッて饒舌る事は一人前以上に饒舌れど、下手な活動寫眞の田舎辯士にもなれず、たま〳〵聲を出せば蟇蛙を踏み潰せし如き浪花節の出來損ひを演じて、山出しの女工を感服せしめんとする具合、實は罪のない哀れな色男、たゞ面長の色白を取得に、白馬の渾名あり、

さらに一人の川田德次郎は二十四歳、その職工となりしは去年の秋、やう〳〵今年の春を迎へて、こゝに同じ土鍋飯の相住居、今まで何處に何をして居たかと問へば、元來の無口に莞爾と笑うて、若旦那の成れの果と洒落れ飛ばせど、いはゆる世間一般の若旦那としては、あまりに頑丈の骨格、あまりに緊張せる面魂、ひよい〳〵と出る言葉に浮世の

裏も表も知りぬいて、をり〳〵の冗談に人情の酸いも甘いも呑み込んだる工合、どうしても今年二十三四の駈け出しとは思はれず、されど見たところは誰が目にも二十五六を出る筈なく、これまでの人生行路、いかなる運命の波瀾を凌ぎ來りしか、いかなる境遇の幾變遷に逢ひ來りしか、いづれにせよ、同じ工場に同じ日給の同じ職工ながら、ちび助の痣長と白馬の吉岡とは、よほど出來工合の違うた男、この川田徳次郎には善惡ともに渾名の的なく、たゞ姓名の二字を取ッて川徳と呼ばるゝのみ、

けふは日曜の朝寢、痣長も白馬も共に天井を仰いで枕を並べ、目は覺めながら起きもせず、セメント會社の煙筒に等しく二人の鼻の穴より揃うて吹き出す莨の煙、すッと白く立昇らせて、

「おい痣長、かうして寢てる時だけがまア我々の極樂だな、世の中に寢るほど樂はなきものを隣りの馬鹿が起きて働く、昔の狂歌にある通りだぜ」

「しかし極樂は日曜の朝、ちよいと平常よりは身體を横に、ゆッくりするだけで、あとの年が年中お互ひに起きて働いても生涯、浮ぶ瀬のない馬鹿な日ばかり送ッてるぢやァないか、この世で眞の極樂といふのは向ふの杉浦だぜ、どうして彼奴あゝなッたらう」

「ありやァ君、銀行を遣ッてるからさ」

「銀行の頭取だッて始めから銀行の頭取ぢやァなからう、その頭取になるまで何をして、あゝなりやァがッたか、現在に向ひ合ッてるだけ猶更ら癪に觸るよ、空腹の鼻の頭で鰻の蒲燒を嗅いてるやうなもンだ」

「だが、いつ見ても癪に觸らないものが一個、あるだらう」

「はゝゝゝあの娘かい」

「あれが全くの美人といふンだな、ことし十八だとさ、あの娘が出たり這入ッたりするところを木戸錢なしに見られるから默ッて堪忍してるンだ、さうでなきやァ門の前に陷穽でも掘ッて、あの老爺の乘ッて出る俥を引ッくり返してやるさ、加之も一人娘だ、嫁には遣るまい、どンな奴が婿に來るかな、畜生ッ」

「僕は人間を廢めて仕舞ッて、その畜生になッて見たいよ、はゝゝゝ」

折しも今朝、いづこへか早く出かけし川田德次郎の川德、歸り來りて二人の枕頭に冷かなる微笑を向けながら、

「まだ寢てるのかい、さァ起きた、もう九時を過ぎたぞ、いくら休日だッて九時過ぎまで饒舌りながら寢てる奴があるかね、さァ起きた起きた」

川德に起されて、やう〳〵煎餅蒲團を這ひ出せし大山の痣長と吉岡の白馬、今更に慌てゝ面を洗ひ急いで前夜の炊き置を朝飯の茶漬けに掻ッ込みし後、さて改めて別段これといふ用談もない二人は、なほ引續いて向ふの噂、

「ところで、あの娘、なぜあゝ美人に生れたらう、よく世間にあるこッたぜ、金持の一人娘には得て二目と見られない醜女の多いもンで、もし裸のまゝ突き出せば嫁に貰ひ手も婿に來る奴もない筈を、慾の世の中、金が光るから相應の亭主が持てるンだ、して見ると君、ありやァ財産も容貌も揃ッて、あまり出來過ぎてるよ」

「全くだ、毎朝、女學校へ通ふンだが、ことし十八といへば、もう卒業前だな、あの門から下女に送られて、ずッと出て來るところは、目の覺めるやうだ、まるで名筆の美人畫が脫け出して來たかと思はれるよ、たしか名は久子と聞いてるぜ、名ばかり聞いたッて、つまらないがね」

「世の中で第一の癪に觸ッて、まゝならぬものは金と女で、その金と女の頂上を絶えず目の前に見せられてるのが日給四十錢の職工だからな、つまらないと、たまらないので貴められてるやうなもンだ、その故か知らないが、めッきり近來は痩せて來たよ、いッそ戀煩ひでもして、向ふの玄關へ平駄り込ンでやらうか」

「はゝゝゝそれも宜からう、戀病も一生懸命に煩へば煩ひ當てる事があるからな」

「いや、煩ひ當てる前に此方が煩ひ死でもすれば大變だ、やはり當分まア今まで通り外の女を煩はして置かう、はゝゝゝ」

痣長と白馬の二人、我を忘れて夢中に馬鹿談話の傍らより、ぷッと思はず吹き出せし川徳、

「おい〳〵、月に四度か五度の日曜だ、せめて上野か淺草の邊を用はなくとも、ぶら〳〵出かけて、ゆる〳〵氣を養ッた方が宜いぜ、向の杉浦が百萬あるか二百萬あるか知らないが。あかの他人だ、いくら騒いでも羨ンでも鐚一文にならないよ、はゝゝ第一またあの娘、あれが何だい、久子にしろ、きなこ餅にしろ、美人は天下に彼女一人ぢやァなし、廣い世の中に男は腕次第で女は撰取だ、も少し馬力を掛けて氣の利いた考へを出せよ、生涯このまゝ日給四十錢の職工で終る料簡かい」

ちびの痣長、木乃伊の如き貧弱の痩せ面を突き出して、

「おい川徳、大そうな事をいふね、どうせ出來ないこッたから、やけ半分に諦めて、そンな口も聞けるが、縁は異なもの味なもので、もし萬一あの娘が妙な調子になッて來て變な氣でもあるとすれば、どうするい、なァ吉岡」

のッぺりの白馬、その尾に付いて膝を乗り出し、

「さうとも、口ぢやァ、どンな事もいへるが實際あの財産に現在あの娘を付けて呉れるとなりやァ、あまりの有難さに驚愕して、うンと其まゝ氣絶でもするだらう」

年齢は下なれど、ぬッと上より二人を見下す川徳、ま〻〳〵冷かに笑ひながら、

「金と女で氣絶すりやァ、日本銀行の前と藝妓町は無事に通れないよ、はゝゝゝ」

諺にいふ隣りの寶を數ふるよりも馬鹿げたる向ふの杉浦家に對し、いはゆる痴人の夢を談ずるよりも白痴けたる娘の噂は躍起となり、ま〻〳〵金と女の熱に浮されたる二人の頭上へ、氷襲の如き川徳の冷笑、

「おい〳〵、どうしたンだい、もう宜い加減にしろ、いくら此方で君等が目を剝いたッて、氣を揉ンだッて、相手は蚤に喰はれたほども感じないよ、はゝゝゝそれよりも現在、その身に取ッて出來る事を考へるさ、端が尖ッて居ても、楊子で石臼は貫けず、形は似て居ても、蒟蒻で石垣は築けないからなァ、はッはッはッ」

川徳の苦笑は冷笑となり、その冷笑また大口の高笑ひとなりしに、むッとせし二人、痣長まづ小膝を乗り出し、

「川徳、何が呵しいンだ、いやに大きな口を開いて笑ッたな、出來る事を考へろとは全體、どンな事を、どう考へるンだ」

白馬も聊か跳ね出して、のッぺり面を赤め出し、

「たとひ出來ても出來なくッても、かう面白く話しかけた事に、いち〳〵皮肉な文句を挿む奴があるかい、同じ土鍋飯を食ッて居ながら、友達甲斐のない男だぜ」

川徳ます〳〵笑ひ出して、

「はゝゝゝ皮肉でも何でもないよ、あまり二人が縁も由緒もない向の金と女で夢中になッ

てるからね、馬鹿々々しいにも程度があると思ッて、御尤様ともいへない乃公が、ちよいと笑ッたのさ、はゝゝゝまァ僕の考へぢやァ今のところ、あかの他人の金や娘で餘計な氣を揉むよりも、さし當り自分の日給を二錢でも三錢でも上げる工夫が宜からうと思ッたからだ、しかし出來ない事を承知の上で、たゞ坐興の冗談半分に話だけ面白くするといふなら、この僕も改めて夢中の仲間入するぜ、どうだい、天下廻り持の金は入らないが姉も妹もない杉浦家の一人娘、あれを一番ころりと落して見ようか、三人競爭で、遠くて近いは男女の慣例だ、まして目と鼻の間に毎日、かう近く向ひ合ッてる以上、どうかすれば、どうかなるだらう、見る影もない襤褸洋服に破れ靴を穿いて古ぼけた阿彌陀帽子の職工が百萬長者の一粒種を手に入れたとすりやァ。昔の野武士が空拳で一國一城を取ッたも同じこッた、まさか惡い氣持にもならないぜ、はゝゝゝたゞ影で指を咬へて居たッて無效だ、ほしいと思やァ遠慮なく大膽に手を出して、食ひたいと思やァ鬼でも蛇でも三盃酸にして食ふくらゐの勢ひがなくッちやァ、男らしくない、おい大山、はゝゝゝあまり身體は大山長吉でもなく實は一人前の五尺足らずで、小山短吉といふ方だが、面に黑痣あるだけで不具者ぢやァなし、目も鼻も口も置處の間違ッて居ない人間だ、ぐッと度胸よく當ッて見ろ、相手の親が杉浦長藏で、君は長吉、たゞ藏と吉との相違で同じ長の字に緣がないともいへない、また吉岡も吉岡だ、人は白馬だの何だのといふが面長の色白は古來色男の相場だ、無論、よく見ると聊か南風に逢ッた飴のやうに、伸び過ぎてるかとも思はれるが、なァに澁紙を疊ンだやうに黑くて縮ンでるよりは遙かに勝だ、下手な浪花節で女工を追ひ廻す片手間に向ふの娘も追ッかけてやれ、この川德も平生の心易さは別として遠慮なく君等二人と競爭するからね、はゝゝゝ」

のッぺりの白馬も、ちびの痣長も、暴風に木ッ葉の舞ふが如く吹き飛ばされて、冗談と本氣の境目も分らねば、猶更ら怒るにも怒られず、たゞ呆れて茫然、

瞬間に萬里を通ずる無線電信あれど、わづかに三間幅の道路を隔てし煉瓦塀一重の透視術なく、例の三人が杉浦家の噂に我を忘れて夢が夢中の眞ッ最中、その的となりし一人娘の久子もまた奥の小座敷に三人の噂、

噂は同じ噂なれど、久子の身に取りては門前に山賊の棲家でもあるやうな噂、晝夜お傍去らずの下女お末を相手に美はしき眉を顰めながら、

「ねエ末や、いつまで向の長屋あのまゝになッてるンだらうね、お父さン、仰しやッた通り一日も早く買ひ潰して下されば宜いに、わけて門の前に嫌な職工が三人、ごろ〳〵住ンでるからね、氣味が悪いよ、出入る毎に變な目附で、じろ〳〵見られるンだもの」

お末といふは今年二十三四、いづこも同じ下女共通の體格を遺憾なく備へて、まン圓く脂肪的に肥り返ッた顔の雜作を崩し、べちやくちや饒舌る前後には必ず無意味の高笑ひ、

「ほゝゝゝ全くで御坐います、私でさへ氣になりますもの、嘸お孃樣の御目觸りになるで御坐いませう。第一まア貴孃、あの人間を御覽あそばせ、いくら職工だッて、あゝ妙に嫌なところばかり揃ッたのはありませンよ、三人の内、一人は顔に黑痣のある痩ッこけた、うす汚い、みすぼらしい、ちンちくりンで、ひよこ〳〵小胯の刻み足に歩く工合は、まるで畫に描いた貧乏神、そッくりです事、ほゝゝあれでも本人は世間竝に男の料簡ですから、づう〳〵しく平氣に探し歩いて、女房を持たうと思ッてるかも知れませンよ」

「まア末、いくら何でも、かはいさうに、ほゝゝゝ」

「だッて、お孃樣、さうで御坐いますよ、まだあれで、ちンちくりンの方は見て居て呵し味も御坐いますが、も一人の男、どうでせう、あンな風をして居ながら恥かしくもなく頭の毛ばかり、ぴか〳〵光らして、蜻蜓と間違ッてるンですね、ほゝゝゝ塵溜の塵埃は見苦しくないと同じやうに職工は職工らしく、せめて色でも黒ければ却ッて目にも立ちませンがいやに生白く間伸びて、普通の手拭では迚も滿足に頰被りの出來ないほど長い顏ですもの、誰だッて振り返りますよ、それを彼奴、をかしく變に考へるンで御坐いませうが、すうッと氣取ッて聊か反り身に澄し込む工合、お孃樣、ぞッと身體中が寒くなッて齒が浮きますよ、私も決して油斷は致しませンが、なるべく貴孃お氣を付けて在らッしやらないと、あゝいふ奴は何をするか知れません、つまり色狂者になッてるンで御坐いますからね」

たとひ本人の知らざる噂にせよ、この下女め、あまりの影口、かう殘酷に取扱はれては痣長も白馬も立つ瀨なく、久子は猶更ら氣味わるけに、

「あら、いやだ事、あとの一人も、そンなの」

お末は俄の眞面目、

「ところが、お孃樣、あとの一人だけは、さうでも御坐いませンよ、まるで二人と違ッて居りますの、どうせ職工ですから、よごれては居りますが、よごれた中にも何處となく垢ぬけて、いや味ッ氣のない、きび〳〵と男らしく緊ッた顏で御坐いますよ、急に思ひ出されませんが、あれは私、こちら樣へ御奉公に上る前、どッかで見た人のやうに考へますの、たしかに元からの職工では御坐いませンね」

けふの日曜を向の噂に送りて、平常よりも早く夕飯の箸を置くや否、川徳、いづれへか出で行かむとして二人を振り返りながら、

「おい、ちよいと出てくるよ、けふは下らない馬鹿談話に釣り込まれて、折角の日曜を潰して仕舞ッた、何、競争、はゝゝゝ競争は二人で勝手に遣れ、乃公は冗談だよ、女の競争より生存の競争が第一だ、食はずに色氣が出るかい、はッはッはッ」

ぶらりと出でし鼻頭の眞正面、杉浦家の大門より今しも現はれし俥の上は例の久子、これを門前まで送り出せしは例の下女お末、盲目でないかぎり見ずには居れぬ川徳、久子を乗せし俥は其まゝ疾風の如く走せ去りて、あとに立てる下女の目と川徳の目、ふと見合ひし一刹那、その視線の遣り場なかりしか、どこやらで見た事のあるためか、おもはず下女の輕き會釋に、此方も思はず阿彌陀帽子に輕く手をかけ、ちよいと目禮せしまゝ無言に別れし内と外、

この樣子を半窓の破れ障子より差覗きしは痣長、だしぬけに白馬の背後へ獅嚙みついて、

「さア大變だ、大變々々」

不意を喰ひし白馬、

「痛い、痛い〳〵放せ、なゝ何だ火事か」

「火事や地震どころか、たゝ大變だ大變だ、川徳の畜生」

「川徳が、どうした」

「殘念だア、殘念で堪らない、あの野郎、疾から向ふへ渡りを付けて居やァがッた」

「證據でもあるのか」

「あるも、ないも、太い奴だ、道理で今日、談話の眞ッ最中に妙な笑ひ顔をしながら三人で競爭しようかと吐したよ、現に今、向ふから例の本尊が俥で出る途端、出合頭に野郎め、ちよいと立止ッた、すると送り出した下女が後に殘ッて、互の會釋だ、あの會釋が氣に入らない、おい吉岡、新聞なら號外だぜ」

のッぺりの白馬、ます〳〵間伸びの面を長くして横に振りながら、俄に腕を組み始め、

「ふゝン」

「ふゝンで納ッて居れるかい」

「居れない、どう考へても納ッて居れない、三人とも揃つて恨みッこなしに出來ないとすれば、また出來ないで諦めも付くが、同じ職工で同じ屋根の下に同じ鍋のものを食ッて る彼奴一人、さうと聞いちやァ吉岡定勝、これでも死んだ祖父さんは舊幕時代に五百石の侍だからな」

「祖父さんは君どうでも宜いよ、現在あゝいふ始末を默ッて見物して居れないぢやァないか」

「默ッて見物して居たンだらう、現在さういふ始末を見れば何故その時に飛び出して、川德の横面を一擊、不意に喰はしてやらないンだ不意を喰ッて驚いたのは乃公だぜ、敵を捨てゝ味方に獅嚙みつくといふ奴があるかい、おまけに背後から咽喉笛の横を掴まれたぞ」

「あの場合だもの、咽喉を掴むか耳を嚙るか分らないよ、しかし殘念だな、ところで川德め、何處へ出やァがッたらう、向ふの本尊も日曜で學校のない筈だ、それが夕方から俥で、雙方お互ひに時刻も違はず、兼ての約束、内々そッと萬事を心得てる下女の相圖に

彼奴が首肯いたとすれば、さア事だ、ます〳〵たまらない、さアじッとして居れンぞ」
ちびの痣長、五尺に足らぬ痩ッこけた身體を舞鼠の如く、ぐる〳〵立ッて廻り出せば、白馬も共に狼狽へ出して、
「畜生々々」

わづかの道幅に向ひ合うて、をり〳〵の出合頭に顔は見知れど、あの下女と思はず互に會釋せしは今日が始めて、されど何の氣もなく無頓著の川徳、ぶら〳〵と入谷を出でゝ屏風阪より上野の山を通りぬけ、まだ春寒の淋しき夕暮に池の端を眺めながら、本郷二丁目の下宿屋、
「泉谷は居りますか」

居ると聞いて其まゝ二階へ上りしは、屢々こゝに訪ひくる親密の間柄、廊下つゞきに一室の障子を引き開けて、ぬッと無遠慮に首を差入れながら、
「やア泉谷、相變らず勉強してるな」
其まゝ机の脇に坐り込めば、居ながら身を捻りて強度の近眼鏡を光らせつゝ川徳に向ひし二十五六の男、神經質に色は青ざめて快活の風に乏しけれど、いはゆる近來の思想家と稱せらるゝ一種の氣分を浮べ、それが却ッて本人の何よりも誇り顔、
「どうだね川田、やはり依然として例の如く例の通りかね」
「暫く來なかッたが、例の通りは當分まだ續くよ、まア早くて今年中は、やはり職工だ、しかし同居してる奴は二人とも、たゞの職工で、つまらない馬鹿談話の相手には面白いが、さて友達として語れる人間ぢやアないからね、また久しぶりで君と喧嘩しに來たよ、

はゝゝゝ幸ひ今日は休みだが、寄席へ行くには錢がなし、活動を見る氣にはなれず、料理屋へ這入る金は猶更、どうしても仕方なしに君の方へ足が向くね、來る毎に喧嘩しながらも、をり〳〵顔を見ないと、やはり物足らないからな、同鄕といふばかりでなく、こりやァ君互ひに、よく〳〵前世の深い因緣だぞ、はゝゝはゝ」

泉谷も思はず苦笑ひ、

「とんでもない男に前世の因緣を持ッたもンだ、どう挨拶して宜いか分らないね、はゝゝゝ」

川「しかし君、さう朝夕その机にばかり向ッて居ちやァ毒だぜ、あまり達者でもない身體を、ます〳〵弱くするのみだ、或意味より見ると人間は頭腦に物を容れるだけ段々と身體に缺損を生じて來るンだからね、たまには乃公と罪のない喧嘩でもして、沈みかゝッた陰鬱の氣を晴らした方が宜いぜ、つまり乃公は君の抗鬱劑として、をり〳〵來てやるンだよ」

泉「だがね君と僕とは元來の性に於て希望の點に於て主義の上に於て其他一切、總ての上より全然、根柢を異にしてるからね、友達は友達で加之も竹馬の友だが、なるべく議論の衝突を避けた方が宜いね、お互ひに感情の動物だ」

川「はゝァ、君は一時の感情的で、竹馬の友を避ける考へかね」

泉「そろ〳〵始めたよ、すぐ、それだから困る、それが川田、いかンよ、つまり雙方の感情を害するよりも、害しない方が無事ぢやァないか」

川「すると泉谷、友達の惡い事を知ッて居ても、知らない顔で默ッて捨てゝ置けといふのか、みす〳〵友達の間違ッてる事を傍觀しろといふのか」

「おい川田、さういふと何だか僕に悪い事や間違ッた事のあるやうだな」

川「やうでない、正しく悪い事がある、たしかに間違ッてる事があるぞ」

「どこにある、どう悪い、どう間違ッてる」

川「それを君、自分で自分が分ッて居りやア、まさか殊更に好ンで悪くも間違ひもすまいが、本人に分らないから乃公が注意してやるンだ、いち〳〵證據を擧げて、ゆる〳〵說いて聞かすから、まア靜にしろ」

「靜にしろとは、けしからン」

川「面白い」

「何が面白い」

川「はゝゝゝいよ〳〵乃公の術に乘ッて來たからさ、おい泉谷、しッかり來い、乃公が去年以來、學問も何も捨てゝ仕舞ッて電氣會社の工場へ日給四十錢の職工になッた主意と、ろくでもない文學熱に浮かされて半病人の寢言を竝べるやうな著述家にならうといふ貴樣の主意と、いづれに最も人生の深い意義あるか、今夜ア一番、うンと戰ッて見るンだ、しかし腹が減ッたら蕎麥ぐらゐ奢れよ、饂飩でも堪忍する」

川「徳、ます〳〵敵を調子に乘せて引き寄せ、ぱくりと一口に鵜呑みの勢ひ、

「おい泉谷、全體まア君は、どういふ動機から、どう間違ッて、どういふ不心得で文學者になりたいンだ、文學といふもの、それほど尊いもンかね」

泉谷は目鏡越に川田の顏、つく〴〵と見詰めて、泣かんばかりに溜息を吐き出し、

「嗚呼、なさけないなア、兄弟よりも親しい君の口から、そもそも文學の尊い事を今更ら尋ねられるとは、實に心細い」

M「さう心細がらずに何とか氣焔を吐けよ」

B「いや、止さう、無效だ」

M「なぜ」

B「先刻もいふ通り、君と僕とは、始めから全然その出發點が違ッてるからな」

M「違ッてるもンか、五年以前、同月同日に鄕里から手を携へて此の東京へ出發して來たぢやァないか、はゝゝゝ」

B「川田、馬鹿にすると承知しないぞ」

M「馬鹿にされず大に論じて見ろ」

B「いくら論じても、この文學の淸く尊く偉大にして崇高なる所以は迚も俗物の君が耳へ這入らないよ、いはゆる馬耳東風だ、僕に關せず焉で君は電氣會社の職工、それが宜からう、

絕えず休まず神妙に勤めると段々一日給も上ッて行くからね、五六年も經てば職長ぐらゐになれるさ、その時分に僕が泉谷紫影の名を以て、いかなる著述を天下に出すかまァそれまでの間、お互ひに議論は中止だ、はゝゝゝ」

「おッと、待ッた、それで中止されちやァ此方の割が惡いよ、おい泉谷、この乃公は五六年先の職長ぐらゐを目的で今この職工になッてると見えるかね、いや見えるかも知れないな、君の目鏡は四度といふ近眼だから無理もない、現在その强度の近眼鏡と等しく社會人生に對する見識も方向も一寸先は闇だ、世間の廣い幅も深みも人間の裏表も知らないから、戀とか愛とか誰でも出來る事を珍らしさうに騷ぎ歩いて、矣とか屁とか水ッ溜りの泡沫のやうな事を御大層に嬉しがッて居れるンだ、はゝゝゝいくら得意の名著を天下に出す覺悟でも、そりやァ君、天下でないぜ、いはゞ蒼海の一粟だ、社會全體の上

からは存在を認められない僅な小さい狹い範圍内で、やはり君等と同じやうに、顏の色の靑ざめた精神的の異狀を來した奴等が讀むばかりだ、それをまた君の方ぢやァ大變な名譽に心得て、共鳴したとか謳歌したとかいふンだらう、第一に君の紫影といふ雅號が變だよ、泉谷藤三といふ藤の字から取ッて紫影としたンだらうが、なぜ露骨に藤影としない、藤には白いのもあるぜ、紫影とは君、死ねエと聞えるよ、はッはッはッ、ところで川田德次郎、不肖ながら立派に戸籍面の外、そンな怪しい名は持たない、この川德の名を以て他日、この社會に誇るべき貢獻的の大仕事をする考へだ、つまり職工以上の專門學者や技術家は成功の曉、いつ何時でも金で自由自在に傭へるが、こゝ一二年の間、それ以下の職工となッて實地に學ンで置かなければならない理由があるからだ、絕えず空想ばかり描いてる君等の頭腦ぢやァ迚も分るまい、はゝゝゝいや、時に、よほど饒舌ッたと見えて、そろ〳〵腹が減ッて來た、おい泉谷、時刻は宜いぜ、この邊で蕎麥か饂飩を出したらどうだい」

本鄕の下宿屋に竹馬の友を相手として、誰憚らず思ふ存分に無遠慮の大言壯語を逞しうし、食ひ過ぎの腹にレモンソーダを飲んだ心地、ぐいと久しぶりの溜飲を下げし川田德次郎、夜の十時ごろ、やう〳〵入谷の塒に歸り來れば、あすの早出に宵寢する筈の二人が目を剝いて待ち受け、じろ〳〵と睨み返す膨れ面、

「まだ二人とも寢ないのかい、用もないに妙な顏をして起きてるぢやァないか、もう遲いぜ」

わざと顏を突き出して額越の痣長、

「寢られるかい、どうせ乃公は妙な面だよ、見慣けりやァ氣に入ッたやうに直してくれ」

白馬は横を向きながら尻目にかけて、

「おい川德、お樂みだな今夜ァ、全體、どこへ藻潛り込ンだ、白狀して仕舞へ」

川德、おもはず小首を捻りながら、

「何が何だか、さッぱり分らない、揃ッて變な事を言ひ出すぢやァないか、どうしたンだい」

「どうしたか、其方で考へて見ろ、ふざけた奴だ、のこ〳〵今ごろ歸ッて來やァがッて、人を馬鹿にするない、知ッてるぞ畜生、もう祕しても無效だ、なァ白馬」

「ほンたうだ、どこで逢ッたか知らないが、こゝを出がけに門口で、あの肥ッた下女と衆ての相圖、兩方から無言で首肯ぎ合ッた事を、たしかに見届けて置いたンだ」

はゝン、この馬鹿野郎ども、あれを嫉妬半分の廻り氣に邪推し過ぎて、叶はぬ戀の敵に取ッた工合、こりやァ面白い、この上ます〳〵氣を揉ましてやらうとは川德も顏に似合はず惡洒落に罪の深い男、わざと兩手に頭を押へながら、

「やァ、あれを見られたかい、あれを見られた以上、もう仕方がない、かうなりやァ乃公も男らしく白狀するよ、實はね、まだ本尊と出來ては居ないンだ、出來ては居ないが、忘れもしない去年の十二月、おし詰ッた二十六日の晩だッたな、ふとした事から妙な工合になッて來て、それ以來あの下女が橋渡しで、內々そッと艶書の取り遣り、さうさ、五六度も、したかね、加之も戀は人しれず忍ぶに情の增すもンで、近來ぢやァ矢も楯も堪らなくなッたらしい、どうしても文通だけでは承知しないから今夜、ちよいと或場所で、逢ッて來たがね、いよ〳〵逢ッて見れば、やはり處女だよ、いくら募ッても、まだ

初戀の十八だ、ほッと顔を赤くして、差俯いたまゝ物もいへず、もぢ〳〵するばかりだが、そこが實に千兩」

こゝまで念入に痛められし痣長と白馬、もはや刄向ふ力なく、互に顔を見合はせながら、おもはず身を震はして半泣きの聲、

「おい〳〵川德、あンまり酷いぜ、も少し遠慮して手柔かに遣ッてくれ」

「はゝゝゝ濟まないね」

「濟まなさ過ぎるよ」

「だッて、實際だから仕方がない、しかし此方も料理屋の女や藝妓に向ッたやうな事は仕ない、どこまでも相手を令孃扱ひに、ちやンと膝も崩さず、わざと世間談話に紛らして兎も角も今夜は、きれいに別れたが、偖この後、この調子で押して行けば、餘儀ない

自然の結果、どうなるだらう」

痣長ます〳〵自己の身を悲觀して、ものゝ哀れに同じ白馬を見返れば、此奴また氣ぬけの如く悄然と打凋れたる顏色、川德いよ〳〵腹の底に呵しく、吹き出る笑ひを奥歯に嚙み殺しながら、

「かうは、いふもンの、考へて見ると相手は富豪の令孃で此方は垢染みた其日ぐらしの職工だ、いざとなれば急に嫌氣がさして遁げ出すかも知れないよ、はゝゝゝしかし今日まで友達の君等へ祕した申譯に、ウント何か奢りたいが、奢る金はないからね、かうしてくれ、おい痣長、何時でも宜い、あの下女に出逢ひ次第、あれに奢らした方が早いよ、ぐづ〳〵外の事をいふに及ばない、たゞ默ッて眼前へ手を出すンだ、ね、すると先方ぢやァ胸に覺えがあるから、どきンと來るさ、わるい藝だが、そこを付け込ンで、にやり

と笑へば、きッと幾何かになるよ」

向ふ見ずの馬鹿頓狂に出來たる痣長、うか〳〵すれは實際に遣りかねぬ奴、

今日は川徳も白馬も夜業の番に取殘されて、夕鴉と共に工場より歸り來りしは痣長一人、もし勇ましき形容詞を用ふれば、戰場より馳せ戻りし武夫の甲冑を脱ぎしと同じ筈なれど、實は一種の惡臭を帶びたる襤褸洋服を脱いで破壁の折釘に引ッかけ、著替は地色の褪げたる染絣の古布子に垢染みたるシャツ一枚、繩の如く糾れたる木綿絞りの兵兒帶を尻下りに結び、尖れる肩より痩せたる眞ッ黑の痣面を突き出しながら、ぽつねンとして談話相手もなく坐せる體、これで本人に智惠も工夫も考へもなく、たゞ向ふ見ずの馬鹿頓狂に調子づく奴とすれば、その向ふに廻されし災難は杉浦家の下女お末、

まさかこれほど念の入りし馬鹿が我身を付け覘ふとは知らず、何か用ありて上野の廣小路まで行きし歸るさ、阪本町より入谷への淋しき宵闇を、そッと待ち受けし痣長、やり過せし背後より、

「もし、もし〳〵、ちよいと」

道路でも聞かるゝ事と思ひしか、立停りて振り返りながら、

「何か御用ですの」

あたりに人なく、垣根つゞきの闇がりに、ちよこ〳〵と歩み寄りし痣長、

「今晩は」

聊か薄氣味わるくなりし下女、其まゝ無言に街燈のある曲り角まで急ぎながら、追ひ來りし痣長の顏を見るや否、

「おや、お前さん、向ふの人ね」
「へゝゝゝどちらへ」
「歸るンですよ」
「ぢやァ御一處に」
「ふざけては困ります」
「どうせ、困るでせうよ、はゝゝゝ川徳の一件、種が上りましたぜ」
「川徳、川徳とは何ですの」
「とぼけても無效、兎も角も奢ッて貰へるでせう、萬事それと承知しながら、おとなしく默ッて二人とも指を咬へてるンですからな」
づう〳〵しい奴、ぬッと手を出せば、この下女、たゞの田舍下女でなく、おてンば育ちの

下町風に渡り歩いた今年二十四、きやッとも叫ばず遁げもせず、ぴしやりと其手を拂うて癇走ッた尖り聲、
「氣でも違ッたンぢやないンですか、今まで物も言ッた事のない私へ、だしぬけに奢れなンて、お前さんなンかに奢るやうな惡い事は仕ませンよ。をかしく變な眞似をすると、すぐ其處は交番ですよ」
案に相違の痣長、あまりの勢ひに恐れて、ぐうとも、すうとも得いはず、棒立となりし胸の中央、
「あら嫌だ、この人は」
どンと突いて其まゝ馳け出せしが、突いた下女は十七貫といふ張りきッた大女、突かれた奴は男なれど、やう〳〵十一貫あるかないかの痩せこけた禿助、加之も不意打の六貫目ほ

ど違うた勢ひに堪らず、よろ〳〵と後へ倒れかゝりし我身を支へんとして、またもや脚下の水溜りへ辷り込みし途端、せめて無事に大地へでも轉ける事か、運わるく共同便所の角柱に横面を叩き付け、始めに下女の叫ぶべき筈を此奴この時、きやッ、

夜業の翌朝、白馬よりも一歩先に歸り來りし川徳、何氣なく内に入れば、三人分の煎餅蒲團を被りて、その中より痣長の聲、

「畜生、歸ッて來やァがッたな」

立寄りて蒲團の端を剝げば、やう〳〵に這ひ出して鏢首を持ち上げ、赤く擦り剝けし横面を向けながら、

「こら川徳、これ見ろ」

「やどうしたンだ」

「痛いぞ、痛いぞ」

「痛いだらう、よほど酷くなッてるよ、ちびの癖に喧嘩でもして、やられたのかい、おまけに痣のある方でも擦り剝けば少しやァ薄くなッて宜いに、運わるく右の方だから面中が赤と黒とで、めちや〳〵だ、はゝゝゝ」

「笑ッたな此奴、笑ッて濟むと思ッてるか、この疵は川徳、うぬの故だ、おかけさまで面に新しい印證が一個、よけいに殖えたぞ、さァどうしてくれる」

「何、乃公の故だァ」

「默ッて聞け、前夜あの下女に出逢ッたを幸ひ、例の一件で、うまく奢らしてやらうと思ッたところが彼女、不意に乃公を突き飛ばしやァがッて、辷り轉けた途端に」

流石の川徳、あッと呆れて二の句も繼げず、洒落も冗談も相手に依りけりと今更の後悔せよといへば平氣に放火も盗賊も仕かねまじき奴、凡そ世の中に馬鹿ほど恐ろしきものなしと、俄に坐り直して痣長の前、

「悪かッた、すまない、この通り謝る、乃公が悪かッたよ、何としてでも膏薬代は、きッと出すからね、まア堪忍してくれ、しかし手荒い女だな」

元來お人よしの痣長、眞面目に謝られて、もはや恨みもなく怒りもなく、自己の恥も外聞もない獅子ッ鼻の左右に黑痣と赤疵とを振り分けながら、

「いくら肥ッても大きくても高が女と思ッて、此方は油斷してるからな、どンと不意に胸板を突かれちやァ堪らない、加之も突かれたまゝ後へ素直に倒れりやァ宜かッたンだ、それを無理に踏み止らうとした脚下が水ッ溜りで、つるりと辷ッたから、今度は自分で自分の身體を横ッ倒しに抛げ出した、わざ〳〵一間半も離れてる共同便所の角へ、いやといふほど叩き付けたよ、目から火が出たね、その間に彼女、後も振り返らずと、すたすた遁げて行きやァがッた」

あらためて例の一件その虚實も確めず、たゞ自己の失策談話を打明けて、これほど丁寧に委しく語る奴、寧ろ哀れに氣の毒の至極となりし川徳、頻りに首肯いて、

「なるほど、それぢやァ石地藏でも轉ぶよ、兎も角まア二三日ゆッくりと休ンだ方が宜い、時に何か食ひたいものァないかね、ありやァ買ッて來るぜ、今こゝに無くとも、ちよいと本郷まで一走りすれば二圓や三圓、どうでも仕てくるよ」

「いや、別段これといふ、ほしいもンもないが、氣の故か、腹に反應がなくッて、いけない」

「おッと、よし、今に白馬も歸ッて來るだらうから、久しぶりて牛肉を二斤ばかり、ひッさげて來よう、すぐだ、馬が牛を食ふのも洒落てるよ、はゝゝゝ」

平生は押しても突いても容易に動かぬ川德、其まゝ身輕に飛び出して、杉浦家の煉瓦塀に添ひし横町、急ぎ足の脊後より、

「もし〳〵、ちよいと」

振り返れば例の下女お末

前夜は痣長この下女を背後より呼び止めて失敗し、今日は川德その下女に背後より呼び止めらる、暇で用のない運命の神、何を惡戯するやら、

貧富に向ひ合うて顏は知れど、出合頭に只一度の會釋せしのみ、その杉浦家の下女に呼び止められし川德、加之も前夜は痣長の失敗を演ぜし相手、こいつ何の用かと立停りて、靜に振り返りながら、

「僕ですか」

脂肪に張り切る女の十七貫、まン圓の身體を運び來りて、豫期に反せし案外の笑顏、

「わざ〳〵お止め申して、失禮では御坐いますが、あのゥ、貴君、もし神田錦町で佐藤といふ家の二階に在らッした方では御坐いませンか、たしか川田さンと、仰しやッて」

昨夜の不意討は兩手で痣長の胸板、今この不意討は一言で川德の胸板、

「や、どうして、それを、いかにも錦町で佐藤の二階を間借して居た事がありますよ、たッた三月ほどの間ですが」

あまり肥り過ぎて目は絲の如〳〵、高からぬ鼻は猶更ら兩の頰肉へ消え失せし滿面の笑ひ、

「ほゝゝゝどうも見た方に違ひないと、いろ〳〵考へて居りましたが、やッと前夜、思ひ

出しましたの、ほゝゝゝ今、御一處の顔に痣のある、小さい人、あれは、どういふ人で御坐います、實は昨夜、あの人が」

「あれですか、はゝゝゝあれはね、あゝいふ妙な顔をして居ますが、至ッて罪のない、氣心の宜い、好人物で、しかし大の慌て者で、をり〳〵頓狂に、とンでもない間違ひを起して困りますよ、現に前夜も何だか、大變な失敬したさうですね、お氣に觸ッたでせうが、許してやッて下さい、つまり友達のいふ事を勘違ひして、相手を間違ッたンですよ、はゝゝゝちびですが名だけは大山長吉といひます」

「あら、さうですか、さうとは存じませンから、びッくり致しましたよ、だしぬけに貴君、藪から棒ですもの、ほゝゝゝしかし其時あの人が、川徳と言ッた言葉を、後で考へましてね、あゝさうだッたと、やう〳〵御名前が思ひ出せましたの、川田、徳次郎さンでせう」

「その川田を、どう知ッて居なさるンです」

「それは、いづれ其うちに、また改めて委しく、お話し致しませう、お近くですからね、ほゝゝゝ時に前夜の人、お怪我は、ありませンでしたか」

「しましたよ、かはいさうに、ろくでもない面ですが、まッ赤に擦り剝いて」

「おや、まア、さうですか、すみませン事、ついた貴君、ちよいとした動機でね」

「はゝゝゝちよいとした動機にしては、大分、手厳しかッたやうですな、はゝゝゝしかし自業自得で、彼奴が悪いのさ」

「でも、かう貴君と、お談話した以上、まさか此まゝではね、何か、お見舞を」

「なアに、それには及びませンが、ぢやア、門口からでも聲だけ、かけてやッて下さい、それで本人も滿足しますよ」

實は下女風情に呼び止められて無用の雜談する男ならねど、二年以前に我を知れりといへば、まさか木で鼻を括りし挨拶も出來ず、其まゝ伴うて歸れば、首を伸ばして待ち受けし痣長、

「有難い、久しぶりだ、大變に早かッたな」

牛肉を提げて歸りしと思の外、川德の背後に立てる下女の姿、一目ちらと見るや否、俄に狼狽へ出して面を押へながら、

「やァ面目ない」

一千萬圓の銀行頭取として自個の財産また百萬圓以上と稱せらるゝ杉浦長藏の目には、堂堂たる我門前に絶えず塵埃溜のある心地、第一は火の用心、第二は自動車の出入不便に今日なほ俥を用ひて頗る物足らぬ顏色、これに兄弟姉妹もない一人娘の久子が口より、氣味が惡いと父に迫りし折柄、もし下女お末が尾に鰭を付けて宵闇の痣長一件を騷ぎ出せば、いかに家主の强慾を以て敵するも、前面の長屋一帶、わけて三人の城廓いよ〳〵危き筈、

されど下女お末は、ふしぎに川德の名を思ひ出せしより態度一變、痣長のあの字も口にせず、不意に物でも拾つたやうな顏、ニコ〳〵として久子への注進、たのまれもせぬに、

「お孃樣、やッと分りましたよ」

「おや、どこにあッたの、もう無いものと思ッて居たに、まァ宜かッた事」

「あら、何で御坐います」

「あれ、お前、あの櫛さ、昨日から搜してるぢやないかね」

「ほゝゝゝお嬢様、あれは、まだ見付かりませんが、向ふの三人、あの中の一人に過日、どうも元からの職工でないと申し上げた人間が御坐いませう、どッかで見た事のある人と、それが思ひ出せましたので」

「いやよ、末」

「御免あそばせ、ほゝゝゝですがね、お嬢様、あれは大變な人で御坐いますよ、御當家へ上らない前、私が神田の連雀町で、或家に奉公して居りました時分、その家の親類に錦町の佐藤といふ地所の差配人が御坐いましてね、その二階を間借して居た川田徳次郎といふ人で、只これだけでは何でも御坐いませンが、あれは貴嬢、普通の書生さんと違ッて、二十一の時、辯護士の試驗に首尾よく及第したといふ珍らしい人ださうです、佐藤の主人が連雀町の親類へ來る毎、いつも貴嬢、まるで自分の子息の自慢をするやうに話して居りましたよ、あまり噂が高いので、私も、どンな人かと、お使ひに參ッた時、わざと暇入れて、ほゝゝゝ二階から降りて來る横顔を、ちよいと見たばかりで、運の悪い事、二度目に往ッた時は貴嬢、もう居りませンの、きけば急に引拂ッて故郷へ歸ッたとかで、しかし考へて見ると、その佐藤に容貌の美い十七の娘と十三になる弟が御坐いましたからね、本人よりも親の方が惚れ込ンで、よけいな事まで蒼蠅く妙に立入ッた世話を仕過ぎたンぢやァなからうかと思ひますよ、その後は佐藤の主人、氣ぬけのやうに、がッかりして居りましたもの」

「二十一で珍らしく辯護士に及第したといふ事が、當世教育を受けたる久子の胸に深酷なる一種の印象を與へ、容貌の美い十七の娘を持てる親に惚れ込まれて逃げ出したといふ事が、ことし十八を迎へし久子の胸に猶更ら得もいはれぬ無量の感じを與へ、加之も現在そ

の人が賤しき其日暮しの職工となりて、あの見苦しき門前の弊屋に居るといふ事、あまりの不思議と、あまりの深き事情ありげに、何とやら小説の主人公めいたる心地、

「末、お前、ほンたうなの、それは」

「わざ〳〵貴嬢、嘘を申し上げますものか、現に一昨日、この横町で、あの人を呼び止めて、いろンな談話を致しましたもの」

「おや、さう、お前、談話をして」

「しましたとも、もう貴嬢、心易くなッて仕舞ひましたから折を見て一度、お茶菓子でも、あけようかと思ッて居りますの、ですがね、お嬢様、あとの二人、あれは屑で御坐いますよ」

あはれむべし痣長と白馬の二人は人間扱ひを蒙らず、あれは屑で御坐いますと、

五年の女學校を卒業前の久子が胸に、一字一年の割合よりも深く刻まれし川田徳次郎の五字、今までは見苦しかりし門前の弊屋も、ふしぎに其後の目觸りとならず、あれほど薄氣味わるく思ひしに、をり〳〵此ごろでは振り返りて、門の出入にも急がぬ風情、我部屋と定められたる奥の一室、机の前に向きながら例の下女お末を呼ンで、カステーラの大函、そッと指端に突き出し、

「あのウ末、お前、過日、向ふの何とかいふ人に、お菓子を、あげたいと言ッたね、これでも、宜いの」

「あら、まア、お嬢様、御冗談」

「冗談で、ないのよ」

「だッて貴孃、これは今朝のお友達の方が、わざ〳〵持ッて入らしたんぢや御坐いませンか、まだ貴孃、お手も著かないのに」

「宜いよ」

「宜くは御坐いませン、お手も著いて居ない、かういふ立派な折のまゝ私が貴孃、持ッて參られますか、第一また奥様に叱られますよ」

「ではね、折を出して、切れば宜いだらう」

「それにしても貴孃、これは一番の大釜で御坐いますもの、さンざ召上ッて、もし一片でも二片でも、殘りましたら私が戴いた分として、それを遣はしませう、せい〳〵二切で結構、その上を持ッて行けば貴孃、あの屑も遠慮なしに喰べますよ、のッぺりと、ちンちくりンまで、あンな奴にカステラは罰が當ります、人間が屑で御坐いますから、お芋の藷ぐらゐで分相應」

「ほゝゝゝまア酷い事を、そンな事を、お前、いふもンではないよ、やはり同じ家に居るンぢやないかね」

「殘念で御坐います事、何故また同じ家に居るンでせう、どういふ理由で、あの人が職工になッて、あンな嫌な奴と一處になッてるンで御坐いませう、今度こそ私、よく聞いて見ませう」

それを第一に聞いて來いともいへぬ久子、わざと靜に何の氣もないらしく、

「それでは此のお菓子、半分に切らうかね」

「半分は多う御坐います、三分一も勿體なし、また四半分でも過ぎるし」

「默ッて半分に、おしよ、うるさい」

「さやうで御坐いますか、まア二人の奴、とンでもない有卦に入りました事」

「ねえ末、お前からだと、いふンだよ」

「勿論で御坐いますよ、あの川田といふ人は兎も角、もし二人の奴、お孃様からといへば、おのれの身分も顧みず宜い氣になッて、づう〳〵しく今度は何を强請るか知れませン」

大釜のカステーラ半分、新しき紙に包みし上また古新聞に包みて、そッと人しれず持ち出せし下女、表に向へる半窓の破れ障子より内を窺へば、折しも夕暮の三人、笑ひ談話の最中、

「川田さン、川田さン」

こゝに住んで以來、いまだ曾て耳にせざる女の聲、名を呼ばれたる本人よりも痣長と白馬の二人、はッと思はず首を捻りて、ぐる〳〵と剝き出せし大目玉、

杉浦家の下女が置いて去りし大釜半分のカステーラを腕組みの三人、中にも本人の川徳は思はず舌皷、

「困ッたなア、あれほど押し戻したに、無理に置いたまゝで遁げて歸りやアがッた、全體まア何のためだらう」

痣長は咽喉を鳴らしながら、流石に手も出せず、

「何のためか、そりやア我々二人の知らないこッたが、どうせ食つて貰ひたいと思へばこそ、わざ〳〵持ッて來たのさ、藝を仕込まれた犬のやうに、たゞ睨ンで居ても仕方がないよ、なア白馬」

川徳の目を忍び、ちよいと指端に尻を突けば、電氣人形の如く突かれて首肯きし白馬、

「さうとも、何のためにもしろ、折角の好意を無にするのは氣の毒だ、無理に置いて遁げるくらゐだから、よく〳〵のこツた、加之も大福や餡ころ餅と違ッて、このカステラは下女なンかの持ッて來る品ぢやァないぜ、いづれ奥からだぜ、奥とすれば主人夫婦でもあるまいし、おい川徳、まさか爆裂彈を置いて遁げたやうな氣もすまいぢやァないか、素直に受け納めてやれよ、はゝゝゝ」

いつにない川徳は案外の眞面目、ます〳〵固く腕を組んで太き眉を顰めながら、

「爆裂彈なら寧ろ却ッて始末の仕やうもあるがね、こりやァ少々困りもンだよ、せめて折にでも這入ッて居りやァ、また工夫もあるが、半分に切ッて、紙に包ンで、かうなッてるものを、わざ〳〵今更ら追ッかけて返されもせずさ、食ッて仕舞へば何でもないが、

考へて見ると、よほど扱ひ難い品だ、どうしてくれよう、今日このカステラだけで、まだ後に何も持ッて來なきやァ宜いが、ちよい〳〵かういふ工合に續かれると閉口だ」

「これッきりでなく、ちよい〳〵後から續けば猶更ら、うまいぢやァないか」

「はゝゝゝ君等ァ案外に正直で單純だよ、カステラの一個や半分を眼前に置いて首を捻りながら考へる乃公ぢやァないぜ、時と場合に依ッては朝飯前に菓子問屋の五六軒を踏み潰しても平氣の乃公だ、しかし今このカステラはね、うか〳〵すると人間の生涯を過るかも知れない、や、止さう、つまらない講釋は止すが、實は君等に一應、いうて置く事がある、外でもない前の日曜で、そら、例の馬鹿談話を始めた時、この川徳が向ふの娘と戀沙汰の一件、ありやァ嘘だ、全く嘘だ、つまり一時の座興に饒舌ッた戯れで、面白半分の冗談から出た嘘だぜ、すまないが惡洒落に君等を一ぱい食はしたのみならず、あま

り嘘に念が入り過ぎて、この痣長に飛ンだ迷惑さした事は、實に申譯なく後悔してるンだ、ところで、あの下女、あれも此方で知らない女だが、過日、ふと乃公を呼び止めて貴君は二年前、かういふ處に居たでせうと名まで知ってるから、どッかで見たには相違なからうが、わざ〳〵今日このカステラを貰ふだけの覺えはない、こゝだ、ちよいとした事から世の中の間違ひ易いのは、こゝだ、なァに此方さへ確立して居ればといふがね、人間は或點に於て頗る脆いもンだよ、加之も人情の弱點から間違ッて來る結果は最も怖ろしい、かりに君等としたところで、今日このカステラを食へば、明日あの下女に逢ッた時、まさか不足もいへまい、それが段々と重ッて見ろ、心易くなるに從ひ、たとひ氣の向かない嫌な事があッても、笑ッてやらなければならない、よけいな禮の一言もいふだけ面倒で手數が掛ッて、つまり蒼蠅いぢやァないか」

「いや、物を前に貰ッて後から禮をいふのは間違ひがなくッて少しも蒼蠅くない」

「禮を前に言ッて後から貰ッても宜い、十遍に一度當れば一割だ、はゝゝゝ」

川德、啞然として開いた口が塞がらず、此奴等に眼前以外の事は一切無用と、たゞ一言、

「ぢやァ食へ、食ッて仕舞へ」

きくや否、兩方より一時に手を出して、むしやく〳〵、これを見て川德も思はず笑ひ出し、

「はゝゝゝ二人とも長生するよ」

果して例のカステーラ以來、をり〳〵引續いて種々の茶菓子を持ち込み、これを押し戻せば、すぐ其まゝの置去に遁げ出し、加之も返されぬ品ばかり撰びて、馬鹿々々しく門内へも追ひかけられぬ相手、本人の川德は面を皺めて有難迷惑に困れど、痣長と白馬の二人は

面の雑作を崩して喜び、うか〳〵すれば催促をしかねまじき奴、
けふは二人の夜業に早歸りの川徳たゞ一人を見澄し、まだ夕飯の濟まぬ時刻を考へ、どこで誂へしか折詰の料理を持ち込みし下女、
「川田さン、まだ御飯前でせう」
實際まだ夕飯前なれど、
「いや、すみましたよ、今日はね、一人だから歸りがけに、ちよいと飯屋へ這入ッて」
「あら、まア、いけない事、でも、お寢みの時、も一度ぐらゐ召し上れるでせう、お口には合ひますまいが、こンなものを持ッて來ましたの」
動もすれば置いて遁げる奴、遁さず引き止めて今日こそ二人の居らぬを幸ひ、腹の底を掴み出してやらんとの覺悟、

「や、有難う、二人とも居らないから、まア上ッて、ゆッくり話しなさい、そこを閉めて
實は過日から聞かうと思ッてる事があッてね」
下女は渡りに舟、
「お互ひ樣で、實は此方にも、お聞き申したい事が御坐いますの、ほゝゝゝ川田さン貴君
神田で佐藤の二階に在らした時、お絹さンといふ、別嬪の娘さンがあッたでせう、あの
時、たしか十七ですから今年は十九」
「それが、どうしましたね」
「どうしましたぢやァありませンよ、親子で夢中になッて貴君を大變、深切にしたと聞い
て居りましたに貴君、あれッきりですの、その後、一度も往らッしやいませンか」
「深切も深切でないも、わづか三月ばかり二階を借りただけで、すぐ急に他へ轉じて仕舞

ッたから、その後は、さッぱり」

「あら、薄情です事」

「はゝゝゝ別に迷惑もかけず自分の都合で他へ轉じたのが、二階借の薄情とすれば、後日また無沙汰の申譯に出る時もあるだらう、しかし其ころどうして僕を知ッて居なすッたね」

「世間は廣いやうで、狹う御座いますよ、あの佐藤の親類に奉公して居りましたから、しみ〴〵お目には懸りませンが、よく存じて居りますよ、貴君が二十一で、辯護士の試驗に御及第なすッたといふ事も、ねエ川田さン何故まア貴君、そンな立派な御身分で居ながら今、こンな事をなさるンです、第一それを私、どうしても、お聞き申さないとならない理由が御坐いますの、あまり貴君、あまり不思議ぢやア御坐いませんか、ろく〳〵出來もしないくせに、髯を生して威張り返る人の多い世の中ですもの」

川德、おもはず一種の眼光を放ちしが、また俄に微笑を浮べて、

「なアに、そりやア何かの聞き違ひだ、よし實際にしたところが、ふしぎでも何でもない、人が辯護士の試驗を受けるから僕も受けて見たので、また七面倒な辯護士が嫌だから氣樂な職工になッたので、單純だ、その外に理由も仔細もない、はゝゝゝ東が氣に入らねば西へ向くさ、南向に寢ても北向に起きても同じこッた、はッはッはッ」

「さう仰しやれば、その上、私風情が伺はれも致しませンから、それは、それとして川田さン、あの佐藤の娘、お絹さンと、只今、御奉公してる、お孃さンと貴君、どちらが美しう御坐います」

「わからン、わかりませンな、そンな事を、この川田に何のため聞くンです、聞いて、ど

うするンだ、また何のため近來、たのみも願ひもしないに、いろンな物を下さる、禮を言ひたいが、實は大迷惑だ、其日暮しの職工して居ても他人の物を貰ひたくない、よけいな物を貰ッて食はずとも川田德次郎、餓死しないぞ、おい、こら、下女ッ」

はッと驚き遁け出さんとする下女の袖、ぐいと捉へながら、

「はゝゝゝさう驚かなくッても宜い、今のは冗談だ、怒ッたのは冗談だが、こゝに冗談でなく話す事があるから、よく聞いて下さいよ、はゝゝゝちよいと驚愕したらしいね」

「驚愕しますッね、ちよいとや、そッとの驚愕ではありませンよ、おい、こら、下女ッ、あの時に私、きッと三年ぐらゐ壽命を縮めて居りますよ、第一まア貴君の顏の怖かッた事、この通り貴君さだ胸が、どき〳〵して居ますもの、御冗談なンですか、まアお人の惡い事」

活殺自在、眼球の飛び出るやうに驚かして、はッと顏色を失ひし下女の眞正面より、また俄に笑を含みし川德、

「はゝゝゝおどかしたのは冗談だが、こりやア冗談でなく眞面目な談話だ、外でもない、をり〳〵物を持ッて來てくれる事だけは實際、止して貰ひたい、折角の御深切を無にするのではありませンよ、思召は有難いが、あまり有難すぎると仕舞ひには其方へ、却ッて迷惑をかけるやうな、結果を生ずるだらうと思ッてね」

「川田さン、それなら貴君、決して御心配に及びませンよ、失禮ですが、貴君方は、かうした男世帶で、こちらは少しも御不自由のない身分ですからね」

「そら、その一言で、お孃さンからといふ事が、はッきりと分ッてる、そも〳〵百萬長者の一人娘が、何の緣も義理もない職工に、さう度々、絕えず物をくれるといふのは少

少、變ぢやないか、もし金持が貧乏人に同情するといへば、杉浦家の主人から慈善的に同情すべきで、まだ人の妻とも一家の主婦ともならない娘の身として、いはゞ保護者の手を放れない娘の身として、向ひ合ッた男ばかりのところへ親にも知らさず、ちよいちよい勝手に物を贈るといふ事は、一種の罪惡だ、甚だ宜しくない、それをまた手柄貌に取次ぐといふのは、猶更ら以て、けしからン、まして二年も前の古い談話を持ち出して、佐藤の娘と現在、どッちが美いでせうといふに至ッては、言語道斷、そンな事に目を細くして喜ぶ近來の若い奴等は兎も角、いやしくも多少の前途を考へて今日の境遇を忍ぶ、この川田に對して　寧ろ無禮だ、侮辱してるやうなもンだ」

矢を射るが如くに責め付けて、また忽ち優しく打解けし顏色、

「かういふ當世不向の野暮な人間だから、お上手も、お世辭もない、腹に思ッた事は相手かまはず遠慮なしの無頓著に出る、はゝゝさンざ今まで、いろンな物を貰ッて置いて禮もいはず、反對に好きな文句を並べるといふ我まゝ者に出來てるから、その段は、あしからず、お孃さンに傳へて下さい、しかし今日この無愛敬が却ッて、令孃に對する感謝になるかも知れない、お前さンも亦、あゝいふ立派な家に奉公した以上、あくまで神妙に勤めて、お孃さンの氣に入れば入るほど猶更ら影日向なく、お孃さンのためになるやう心掛けねば、いけないね、第一それが自分の德だよ、こどし幾歳だね、もう二十歳を二つ三つ越したらう、そろ〳〵と前途の事も考へて、今のうち身を固める工夫が肝要だ

それには幸ひ、あゝいふ家で奉公納めをするンだね、入らざる餘計なお世話だが、これは度々お使ひに來てくれた一禮として、ちよいと御注意を申し上げる、はッはッはッ」

ぶッて置いて其上を丁寧に撫でられた心地、じッと差俯いて聞き居たりし下女、こゝに一

世一代の智慧を絞り出し、

「まア御深切に、いろ〳〵と有難う御座います、ですがね、川田さン、迚も私、それだけの事を貴君のやうに、さう、巧く其まゝお嬢様に傳へられませンから、御面倒ですが、ちよいと、お手紙に書いて下さいませンか」

これには川徳、聊か道具外れを遣られし體、

「ばゝ馬鹿な、そンな事が」

「では、かうして下さい、今まで私が取次いで、いろ〳〵持ッて來た物が屆いてるか、屆かないか、お嬢様の方では、わかりますまい、ですから今度、どッかで、ちよいと一言、お禮を」

「いけない、なほ無効だ」

「ぢやア仕方ありませンから、私、間違ッても知りませンよ、どンな工合に申し上げるか、ほゝゝかういふ事は川田さン、得て、よく間違ひ易いもンでね」

「おい〳〵、それは此方のいふこッたよ」

「さうですか」

「さうとも、その調子で、べら〳〵勝手な事をいはれると猶更ら間違ひの基だ」

「不安心な私に間違はれるよりも貴君、直接、ちよいと一言、何とか仰しやッた方が無事でせう」

「あまり無事でないが、ぢやア仕方がない、どッかで顔を見合ッた時、軽く目禮ぐらゐ、するがね、なか〳〵油斷のならない外交官だ、つまり今日の談判は此方が遣られたらしい、はゝゝその代り一度でも目禮した以上、今までのやうに何にも特ッて來ちやア、

いけないぞ、今度は公然、主人公に突き返すから、その覺悟で、わかッたかい」

「わかりました、よく分りました、つまり目禮の濟むまでは、どし〳〵と何を持ッて來ても宜いンですね、はい、さよなら」

其まゝ遁げ歸りし下女の後姿を見て、あきれし川德、相撲に勝ッて勝負に負けた顏、

杉浦家の下女が置去にして遁げ出せし折詰料理、もはや食ふと食はざるに何等の利害なけれど、軒竝びの右隣家は重病の良人を抱へて二人の小兒に泣き付かるゝ哀れさ、やう〳〵女の手內職に其日の飢渴も凌ぎかねたる悲慘を思へば、わづか四十錢の日給なれど身體壯健に飢渴の憂ひなき川德、

この折詰たゞ一個、どれほど我身の滋養になるものかと、其まゝ手に下げて隣家の門口より差覗き、

「おい、かみさン、病人は近頃、どうだね、壁一重で居ながら、ろくに見舞ひも仕ないで濟まないが、やはり此方も暇のない身體でね」

浮世の底に落ち果てゝ見る影もない三十二三の女房、まだ春寒の空に垢染みたる古袷一枚、去年以來の病人は破れ蒲團の中に骨ばかりの身を横たへて、醫者にもかゝれず枕頭に賣藥の袋も既に空虛、その裾邊に七歳の兄が空腹のシク〳〵泣き、母は懷に二歳の弟を抱き入れて眠らせながら、頻りに麻繋ぎの手內職、その手を止めて力なげの聲細く、

「有難う御座います、どうも貴君、かういふ病人で、はか〴〵しくはね」

「それに小兒も二人もあッて、察しるよ」

「因果で御坐いますねエ、お向ふのやうな方もある世の中に」

「なアに、かみさン、百萬長者の向ふに居たッて、同じ人間だ、さう氣を落すにも當らない、踏まれた草にも花が咲くからね、また芽の吹く事もあるさ」

「いゝへ貴君、もう根も葉も枯れて仕舞ッたンですから、芽の吹きやうは御坐いませンよ、せめて夫婦ッきりなら、どうせ諦めて居りますからね、何とか、考へも御坐いますが、御覽の通り、二人の子どもが貴君、ふびンでね、これに引かされて、生きて居りますよ」

「やア、そンな事、きかしてくれるな、かみさン、これはね、ちよいと餘所から貰ッたンだが、手は著けてないぜ、そッくり其まゝだ、氣を惡くせず病人に、食べさして下さい、もし病人が食へなければ、子どもにね、人に貰ッた物で義理をするといふ此方も、かういふ境涯だ、はゝゝゝ」

「おや、まア貴君、もし、お前さン、お隣家から、お見舞を下すッたよ、ちよいと頭をあけて、お禮を」

この一言に川徳また置去の遁げ腰、其まゝ出でむとすれば、烏打帽子を眉深に八字髭の生えた四十前後の男、じろりと物凄き目に睨みながら、

「おい、お前、何だ」

川徳、おもはず立止りて、

「何だとは、何だ」

「どういふ人間で、こゝへ來た」

「けしからン事をいふ、隣家の人間が隣家の病氣見舞に來た、それが、どうした」

「はゝア、隣家に住ンでるのか」

ずッと其まゝ内に入りし體、ふしぎな奴と川徳も今更ら我家に歸れず、心がゝりの戸外に立ちながら樣子を窺へば、わッと俄に女房が泣き叫ぶ聲、

眉を顰めて戸外に立てる川徳、おもはず飛び込めば、鳥打帽子の八字髭また睨み返して、

「おい〳〵、お前が來ても仕方がない、乃公は刑事だ、この女が萬引したから今、引ッ張ッて行くンだ」

重き病人が這ひ出して亡者の如き顏に涙を流しながら頻りに手を合せ、女房は只その場に打伏して面も得あげず、懷に抱ける二歳の弟は無心に泣き出し、今しも與へし折詰に七歳の兄が嚙り付いて、父母の絶體絶命も知らぬ哀れさ、人生この慘憺たる光景を眼前に實現されし川徳、おもはず俄に容を改め、慇懃に腰を屈めながら刑事に向ひ、

「どこで、どういふ、萬引をしたか知りませンが、現在これです、どうか、これを見てやッて下さい」

指ざしながら我身の罪を謝するが如くに哀訴歎願すれど、刑事は輕く首を横に振りて、

「いくら可哀さうでも情實は許さない、わづか反物の一反でも現に證據が擧ッてるから仕方がない、兎も角も警察まで連れて行く」

「いや、その點は、仕方ありませンが、わづか反物一反で、この病人も、この子ども二人も、或は生命に關するやうな結果を生じないとも限りませンからな、固より情實は容れられないにしても、情狀は酌量してやッて下さい、二度と再び、犯すやうな氣遣はありませン、たとひ被害者はあるにしても、その被害者は無論、萬引しられるほどですから、どうせ繁昌する大きな呉服屋でせう、之加も犯罪の豫備行爲があッて社會に害毒を及ぼしたといふほどの大した罪を構成したでもなし、たゞ一時の發作的で、いはゆる

出來心で、つまり修養も何もない無教育なものが現在その日に食へないため起ッた微罪として、特別に、お免しを願ひたい、その反物は私が代價を拂ひますから」

刑事は川徳の容貌と風俗とを今更に見比べながら、おい、お前といふ言葉だけを急に改め、

「君は全體、この隣家に何をして居る」

「識工です、千住の電氣會社に通ッてる職工です」

「職工、や、いづれにしても一應は、連れて行く、今こゝで、どうも出來ない、さア泣いても無效だ、同伴に行けッ」

川徳、頭を下げて刑事の袖を控へ、

「では、どうか、これだけ聞かして下さい、どこの何といふ呉服屋で、どういふ反物です」

刑事も實ト内心、職工風情として不思議の辯說に驚き、うか〳〵馬鹿に出來ぬ男と思ひしか、聲を潛めて、

「君、これは筋でないがね、先刻から君の言葉に對して、關係のない人に漏らすンだ、呉服屋は神田の前田といふ店で、銘仙一反と縮緬の半襟三筋、質屋から足が付いた」

其まゝ泣き叫ぶ女房を無理に引き出せば、後に殘れる父子三人を打守りて、光れる兩眼を涙に曇らせし川徳、おもはず片手の握り拳を宙に振りながら、

「よし、心配するな、乃公が連れて戻る、きッと連れて歸る、暫時だ、堪忍しろ」

銘仙一反と半襟三筋、せい〳〵十圓内外の物なれど、その十圓は偖置き、今こゝに全財産の持ち合せ六十八錢の川徳、四邊を見廻せど賣り拂うて總計三四圓も覺束なし、

取るに足らぬ奴なれど、かういふ急場の時、また使ひ途のあるべき惣長も白馬も生憎夜業

の不在中、日給前借の申込は絶對に叶はぬ會社の規則、加之も口説くべき會計掛の居らぬ時刻、

本郷の下宿屋に竹馬の友、あの泉谷紫影も、いはゆる貧弱の平凡文士、三月ばかりも滯りし宿料に責められて靑息を吹き、過日の痣長一件に牛肉二斤さへ財布の底を叩かせし男、議論は面白けれど、金の相談は迚も卽刻に十圓の見込なし、

被害者を說いて願ひ下げするにも、第一に先立つものは反物と半襟三筋の代價、品物を請け出して返すにも質屋の名を聞き漏らせしため應急の策なく、たとひ呉服屋に事情を訴へ質屋に利害を說き乃至また會社へ飛び込んで夜業中の職工總體に同情を求むるにもせよ、はや日は旣に暮れたり空しく奔走の時間を費して成否は豫期し難く、加之も拘引せられし女房は重き病人と幼き子ども二人を後に殘して一刻の猶豫もなり難し、

金ならば僅に十圓の金、品ならば僅に反物と半襟、これがために一家四人の死活問題を呈せる悲慘の向ふ側に、寢ても覺めても富を重ね行く一千萬圓の銀行頭取ありと思へば、人生の貧富と幸不幸、あまりに懸隔せり、生存の意味と苦樂の差別、あまり殘酷に飛び放れ過ぎたり、

されど現在を奈何せん、

猛然と立ちし川田德次郎、もはや今この場に物質上の力なし、これを救ふは我力の及ぶかぎり、たゞ熱烈なる舌端の焰にありと、俄に手帳の一枚を引き裂いて鉛筆の走り書、これを懷中に其まゝ飛び出し、杉浦家の煉瓦塀に添ひつゝ横町を走せ行かんとせし時、その横町の勝手口より、ひよこりと出でしは例の下女、瓦斯燈の光に目早く認めて、

「おや川田さン急いで、どちらへ」

川徳、振り返りもせず、

「金持の知ッた事かい」

五六間も行き過ぎしが、かゝる時にも電霆の如く頭腦の働く男、ふと立停りて急に踵を返し、

「だしぬけに妙な事を聞くが、もし神田の前田といふ呉服屋を知りませンかね」

「神田の前田、あれは貴君、お出入ですよ、こちらの」

「しめたッ」

不意の大聲に驚きし下女の傍、ずッと立寄りて俄の小聲に忙しく、加之も殊更に馴々しく、

「實はね隣りの嚊ァが萬引したンだ、その呉服屋で、わづか銘仙一反と半襟三筋だがね、質屋から足が付いて今、つい今、先刻、拘引せられた後は病人と子どもばかりだ、幸ひ天の助け、お出入なら急に電話をかけて其、その呉服屋から願ひ下げをして貰ッてくれ、たのむ、乃公が頼む、お嬢さンに頼ンでくれ、きッと金は、どうでもするから」

「あら、まァ、とンでもない、さうですか」

「そンな悠長な事をいはずと一刻も早く頼ンでくれ、遅れると今夜ァ歸れないからね、あの嚊ァ一人で親子四人の生命を繋いでる哀れなもンだよ、わけて亭主は立つ事も出來ない重い病氣だ、一夜、止められても大變な事になるからね、たのむ、是非とも頼む」

「そして貴君これから、どこへ」

「乃公か、乃公は警察署長の宅へ押し掛けて行くンだ、宿直の刑事や巡査ぢやァ埒が明かないからな、たのむ、たのむ、拜むよ、たのむぜ」

川徳の走せ去るや否、下女は慌てゝ奥へ駈け込み、幸ひ久子一人の居間へ息を切らしながら、

「お嬢様お嬢様、たゝ大變で御坐います助けてあげて下さい、あの川田といふ人が大變で御坐います」

杉浦家には二個の電話ありてその一個は久子の部屋に近く奥にあれど、また父母の居間にも近く、さらに一個は、玄關の正面にもありて絶え間なき客用のため右側の應接室まで引き入れ、卓上電話の設備、

下女に委細を聞きし久子、其まゝ下女を伴うて奥より駈け出し、わざと應接の室の扉を固く閉ぢ、卓上電話を手に取らせて、

「兎も角も末お前、おかけ、わたしの代理で、しッかり分るやうに、おかけよ」

下女の末も忠義を見せ場、こゝぞと潛める聲に力を入れて神田の前田呉服店を呼び出し、

「前田さンですか、入谷の杉浦です、お嬢様が大變、怒ッて在らッしやいますよ、とンでもない事だと仰しやッて、あら私、まだ理由を話さなかッたのね、ほゝゝゝあのウ外でもありませンが、お前さンの店で、萬引をして、警察へ連れて行かれた女があるでせう、わからない、とぼけては困ります、わからない事がありますかね、小僧さンだね、いけない、引ッ込ンでお仕舞ひ、急用ですから誰か分る人を、御主人でも番頭さンでも、いつも此方へ來る喜助さンは居りませんか、さう、ぢやァ早く、すぐに出て貰ッて下さい」

杉浦家擔當の喜助が代りしと見えて下女の勢ひ、ます〳〵猛烈、

「今、小僧さンに話しました事ね、お前さンの店で萬引したとかいふ女の事、それに付い

て喜助さン、あれは此方の向ふ長屋に住ンでる、至ッて貧乏な哀れな人なンですからね、お孃樣が救ッてやりたいと仰しやるの、はァ、はァさうですよ、ですからね至急、今、すぐ大急ぎで警察の方へ人を遣ッて、今夜中に願ひ下げをして下さい、喜助さン、かういふ時に働かないと、お出入が止まりますよ、お孃樣が現在こゝに在らッしやるンです、ねエお孃樣、喜助が出て居ります、貴孃からも、お一言」

久子も電話を手に取りて、

「今、末のいふ通りだから、たのみますよ」

金の世の中、この電話に驚きし番頭の喜助、電話口を離れて俄に騒ぎ出し、

「さァ面倒な事が出來た、今日あの刑事が調べに來た、あれだよ、あの萬引一件だ、相手が入谷の杉浦さンとは、萬引のくせに大變な苦手を引き出しやァがッたぜ、二三軒、外の大店からも這入り込ンで實は競爭最中の大事な得意だ、加之も兼々お孃樣の御婚姻を覘ッてる時ぢやァないか、銘仙の十反や二十反に代へられるかい、さァ急いで誰か兎も角も警察の方へ、願ひ下げが出來ても出來なくッても、捨てゝ置けないよ」

この電話の通ぜし時は、警察署長の私宅へ尋ねて來りし川德、手帳を引き裂きし鉛筆の走り書を一枚の名刺として、辯護士川田德次郎の八字、

眉を顰めて打戍りし取次に向ひ、

「かやうな見苦しい風體を致して居りますが、その名刺の人間に相違ありませン、一刻の猶豫もならない事で伺ひましたから是非、御面會を願ひます、委細お目にかゝッた上で」

あまり風體と名刺の相違せる取次の言葉に、寧ろ一種の警察眼を以て迎へられたる川田德

次郎、署長の警視は面の半分を髯で埋めし四十四五の大男、固より別に應接間もなく、書齋兼座敷の壁に官服とサーベルを吊せし八疊、じろ〳〵と打戍りて、

「川田さん、君ですか、辯護士ですね、ことし幾歳になられますな」

念を押されし川徳、見苦しき染絣の筒袖に同じ綿入羽織、さらに心の退けたる體もなく、靜に一禮の後、

「さやう、川田德次郎、本人です、今年二十四歳で、二十一の時、辯護士の試驗を受けました、辯護士の姓名錄お調べになれば、その中にあります、しかし一度も法廷に立ち、また辯護士としての事件を取扱ッた事はありません、たゞ資格を失はないだけにして現在は日給四十錢で、千住の電氣會社に職工となッて居ります」

署長は思はず目を閉ぢて仰ぎ、閉ぢし目を開くや否や、さらに再び川徳の面體を熟視しながら

「はゝア、なるほど、や、思ひ出しました、其ころの新聞紙上で、さうだ、さうだ、ふゝン君ですか、さう〳〵丁年に達した、あの二十一で、はゝア、君でしたか、御姓名は覺えませんが、あまり珍らしいので、それは記憶してゐます、ところで、その君が目下、職工とは」

「いや、その理由は別に御坐いますが、今夜、推して御面會を願ッたのは、實のところ、かういふ次第で」

簡單明瞭なる辯を以て例の萬引一件、加之も第一に親子四人の境遇を具さに演べし後、おもはず座を進め、

「甚だ露骨で恐れ入りますが、私は常に絶えず、この種の犯罪を以て、寧ろ本人よりも

社會に於ける缺陷かと思ッて居ります、泰西の名言に、罪は貧と同居せりの語、また貧は罪を生むの母なりといふ語は、決して彼等を寛假するの意味でなく、實際の今日に餘儀なき實際の現狀ですから、加之も社會の制度、經濟の組織、その他の發展より生ずる總ての恩惠は多く富者に利益して、富の勝利は資本の勝利となり、貧者の敗北は直ちに生活の敗北となり、また富めるものゝ老人も小兒も居ながら暖衣飽食を得ますが、これに反して貧者の老衰と疾病と小兒とは全く人生を呪へる殘酷の責め道具で、この重き病に臥せる良人を持ち、その傍に泣く幼弱の子を抱きながら、女の手内職たゞ一個で著るに衣なく飢うるに食なく破れたる弊屋も今や將に追ひ立てられンとするもの、もし教育なく廉恥なく修養なしとすれば、そもそも生命を保つの道、いづくにありませうか、たとひ多少の教育あり廉恥心あるものと雖も、自殺せざるかぎり人は生きざるべからずで、生の本能に對して事こゝに至れば、恐るべし人間の行爲は勢ひ已むを得ざるに出るかと考へます、まして教育も修養もない不幸の極、この哀れむべき悲慘の極に全然その策の盡きたるもの、その餓死を免れンとすれば、どうしても盜むより外なきに至りませう、これに向うて今更ら道德の講釋を施すのは、あまりに酷で、宗教を說くも亦、あまりに手後れで、これに法を以て臨み刑を以て加ふるさへ、國家としては餘儀なき處置ですが、いはば殆ど網を張ッて鳥の來るのを待つやうな點もあるかと考へます、罪を犯すもの固より刑を受くべきは當然ですが、只今も申し上げる通り、貧は罪を生む母なるといふ哀れな點より來ッて加之も一家四人の餓死すべき悲慘の極、わづか銘仙一反と半襟三筋の萬引で、刑を受くるに至ッたもので御坐いますから、どうか此度かぎり、特別を以て、お許容を願ひます、決して微罪不檢擧といふが如き意味で、御放免を願ふのでは

ありません、あの女たゞ一人の拘引は、忽ち病人と子ども二人の生命に關します、無論、被害者たる吳服屋へは必ず、きッと私が辨償いたします」

署長は耳を傾けて聞き居たりしが、

「よろしい、放しませう、さういふ悲慘な境遇に居るものとすれば、すぐ出してやりませう、兎も角も君、一歩、先に警察署へ往ッて、待ち受けて下さい、すぐに出かけて、一應、訓戒の上渡しませう」

我身の如くに喜んで川德の警察へ走せ行きし時、杉浦の電話に驚かされし神田の吳服屋また願ひ下げに來りて、その後より署長の警視も入り來り、懇々と訓戒の上に放免されし本人は、地獄の釜の底より救ひ出されし心地、

さのみ遠からねど、あまりの恐怖と驚喜とに殆ど正體なき本人は辻俥に乘せて、二十錢の先拂ひを與へし川德、車上に向ひながら、

「なァに勿體ないも何もあるもンか、一刻も早く歸ッてやるが宜い、俥賃は拂ッてあるぜ、さァ急いだ」

馳せ去る俥を見送りて、ふと横を向けば、今しも警察で出逢ひし吳服屋の番頭、わざと川德これに空恍けて、

「番頭さン、よく來てやッて下すッた、感心だね、自然と惡くは報うまい、君の店は繁昌するぜ、きッと繁昌するよ、山のやうに積ンだ中から銘仙たッた一反で、親子四人を殺しても罪だからな」

「へゝゝゝ實は、さる大事な、お得意樣から急に電話が掛りましてね」

「はゝァ、さうか、ぢやァ大事な、お得意樣に對して願ひ下げに來たンだね、つまり損の

ないこッた、しかし其お得意様、どうして知ッたらう、兎も角も本人の僥倖だ、これを縁に僕も亦、手拭の一筋ぐらゐ買ひに行くよ、はゝゝゝ」

はや夜の九時過ぎ、春まだ淺き二月の初旬、北向に筑波颪の殘りを受けて肌寒く、實は宵よりの騷ぎに、夕飯も食はざりし川德、俄の空腹に懐中を探れば、わづかに四十錢あまり、加之も四十錢これを其まゝに抛げ出せぬ境涯、途中の飯屋に飛び込んで飢を凌ぎ、ぶらぶらと歩みし前面より、どこの料理屋で食ひ醉ひしか、二人の藝妓に左右の袂を捉へられて猶その身を支へ兼ねし男、酒氣紛々として高笑ひの脚下に躓き、すれ違ひの途端、よろよろと此方へ倒れ來りしを、すッと外して行き過ぎし背後に藝妓の聲、

「あら危い事、あンなものに突き當ッて御覽なさい、すぐ因緣を付けられますよ」

「ほンたうだワ、しかし運の惡い奴ね、幾何かになるところを、ほゝゝ」

「かはいさうだから呼び止めて、幾何か遣らうか」

「およしなさい、むだですよ」

「つけ上ると困りますワ」

ふざけた奴、突き當られては此方が汚れるぞと、鼻頭に笑ひながら歸り來りし川德、隣家の門口より、

「まア宜かッたね、ゆッくり寢なさい、明日また逢はう」

我家に入りて、五燭の電燈たゞ一個の薄闇き下、火の氣もなく茶も湯もなく、其まゝ煎餅蒲團を引き出して、身を横たへむとする時、表の戸を叩く音、

今ごろ來る筈の人もなし、

「誰だい」

「私で御坐います、お禮に參りましたので」

や、隣家の病人、枕も上らぬ病人の聲に、川徳おもはず跳ね起きて戸を引き開け、ぽッと内よりの餘光に透かせば、蟻の這ふ如くに來りしか、箒を逆手の杖に縋りて夜露に打たれながら、やう〳〵立てる姿は畫がける幽靈そのまゝの物凄さ、

「ありがたう、御坐います」

「なゝ何だい、まア何といふ事をするンだい、その病氣で」

「どう致しまして、たとひ死ンでも、私が一應、まゐらねば、すみませン事で」

川徳は脱ぎ捨てし我が着物を鷲掴みのまゝ背に被せて抱きかゝへ、俄の大聲、

「おい、かみさん、今ごろ何故この病人を出すンだい、早く來た早く、夜風を當てゝどうするい」

一方ならぬ恩義をうけて、やう〳〵盆と正月に端書一枚を差出す奴、これが今日普通の人情にして、動もすれば其一枚の端書さへ出さぬ奴の多き世の中、

恩をうけて恩を忘るゝは、寧ろ無事の人間といふべく、わざ〳〵企みて恩を仇に返す奴の多き世の中、

その世の中を隣り合の壁一重、寢て居ても挨拶の濟むべき事に重き病の枕を上げ、夜露に打たれながら箒を逆手の杖に縋りて、苦しき息の下より我への一禮を演べし哀れさ、

その苦しさと哀れさを思へば、健全の身を以て僅な事に奔走せし我は、差引勘定、猶いまだ彼に借り越したる點あり、よほどの剩餘が行く筈、

たとひ癒えずとも現在あの病人あのまゝに捨て難し、せめて母親と子どもの飢渇を凌がせ

てやりたしと、その夜の川徳、寢ながら頻りに考へて、とろ〳〵と睡りしは曉方の一時、目の覺めしは朝の七時過ぎ、平常よりは一時間の餘も遲く、會社へは三四十分の餘裕あるのみ、

慌て、壁に吊せる古洋服を纒ひ、落しても拾ひ手のない古帽子を阿彌陀に被り、破れ靴の修繕まだ出來ざるための草履穿き、冷飯のブリキ辨當を古新聞に包みて小脇に抱へながら、古ぼけたる弊屋の軒下より立出でし姿、人しれぬ頭腦の中は兎も角、見たところ一切こゝに新らしきものなし、

前夜の今朝、何は偖置いて隣家の門口より差覗き、

「病人は前夜、何ともなかッたかね、とンでもない、わざ〳〵あゝ遲く出て來るといふ事があるかね、大事にしなさいよ」

言葉と共に去り、急いで行かんとすれば、杉浦家の煉瓦塀を引廻せし角に見張ッて、番兵の如く、立てる下女、これも今朝は其のまゝ無挨拶に捨て置けず、

「やァ前夜は大變お世話でした、おかげで萬事、うまく行きましたよ」

「川田さン、ちよいと貴君」

「今朝は少々遲くなッてるから、いづれ、また」

「いけませン、もう用がなくなッたと思ッて、さうなさるンでせう」

「困るな、さういふ理由ぢやァない、時間がないから急ぐのさ」

「でせうがね、あのゥ、川田さン」

「あのゥは御免蒙る、あのゥ川田さンと來ちやァ、段々遲くなるよ、何か用ですかい、用なら早く願ひますぜ、お禮は今、言ッた筈だ」

「まア現金だ事」
「無論、かけ値なしだよ」
「なアに川田さン私は、どうでも宜う御坐いますがね、お孃様が前夜、どンなに御心配なすッたか、折角、貴君からの御依頼だといふので、あの呉服屋へ電話を掛ける時なンか、全く、お顔の色が變ッて居なさいましたよ」
「有難う」
「もし承知しなければ以後一切、出入を差止めると云ふ勢ひですね」
「すみませン、よろしく言ッて下さい」
「よろしく、どう申し上げるンです」
「どうでも其處は如才なく平生の雄辯で、たのみます」

「馬鹿にしてるワ川田さン、毎日お孃様の傍に居る私が、わざ〳〵郵便で」
「はゝゝゝ郵便ぢやない、雄辯だよ」
「雄辯とは」
「その達者な口でさ」
「この達者な口で何を、お饒舌しても宜いンですか、後で貴君、否應は、いけませんンよ」
「たまらない、時間々々」
「逃げると追ッかけますよ」
「どうか助けてくれ」
「ほゝゝゝ嬉しい事」
「何が嬉しい」

「怒ッては嫌よ川田さン、どういふもンか私、ちよいと貴君を窘めてあげるのが、何よりも嬉しいの、全體、貴君は瓢箪鯰で、いくら押へようと思ッても、づる〳〵外す事の上手な人ですからね」

「鯉でも鯰でも宜いから今日は此まゝで放してくれ、これから一日の餌を食みに行くンだ、憐れむべし職工々々」

川徳と行き違ひに歸り來りし痣長と白馬の二人、もし前夜の事を知れば、もはや濟んだ後でも騒ぎ出す奴なれど、隣家の嚊ァは流石に我身を恥ぢて顔も出さず、杉浦の下女も川徳の居らぬ時には用のない人間、

夜業の翌日は朝より寢るに極りし二人、其まゝ枕を竝べて正體なく横たはりしが、腹が空く事だけは一人前以上の男、そろ〳〵晝前に目を覺して、

「おい痣長、もう起きようか」

「起きても宜いな、何時だらう、腹加減は恰好、正午だぜ」

「何か今日は、うまいものを食ひたいな、向ふの下女め近頃、ちよい〳〵いろンなものを運ンで來るが、かういふ時に氣を利かして鷄の一羽ぐらゐ、ひよいと窓から投り込ンでくれないかなァ、酒の一二升も添へてよ」

「だめだ、川徳が居ないから無效だよ」

「それが癪に觸るぢやァないか、我々二人を馬鹿にしやァがッて、ありやァ全體、娘の差圖だらうか下女の考へだらうか」

「どうも娘らしいな、いくら金持の家だッて奉公人が君、あゝ勝手に物を持ち出せる筈は

ないよ、第一また菓子にしろ何にしろ、持ッてくる品が下女の手錢で買ッたのと違ッてるさ、食ふ事は食ッてやるが、考へると、あまり宜い氣持は仕ないぜ、いや〳〵ながら乃公達に食はしてるンだからな、餘ッたら二人お喫べなさいといふ工合で、つまり厄介扱ひだよ」

「その工合でも厄介でも宜い、當分まァ川徳を囮にして、なるべく美味いものを運ばしてやらうぢやァないか、思はれるのは川徳で、食ふのは此方だ、はゝゝゝ」

「ところが川徳、少しも嬉しさうな面せずに、いくら思はれても彼奴、あの通りの無愛敬で、ぷン〳〵してるが、どッか外に自分の方から思ッてる女でも、あるンぢやなからうか」

「もしそれとすれば、兩手に花といふ事を知らない奴だ、あまり智慧が無さ過ぎるよ、乃公ならば其處に凄い腕が出るね、うまく向ふの娘を操ッて、取ッた金を好きな女に注ぎ込むといふ寸法だ、をり〳〵川徳の奴、むづかしい小理窟を捻くるが、偖、かういふ道には案外の坊ッちやンだぜ、敎へてやらうか」

「いや待て、うか〳〵敎へると乃公達の喰ひ分がなくなるよ、彼奴が坊ッちやんで居るから向ふが氣を揉ンで、いろンなものを持ッてくるのさ、第一また川徳に兩手の花を見せつけられて堪るかい」

「なるほど、その邊もあるね」

「大ありだ、うッかり彼奴に智慧は貸されないぜ、いくら一つ鍋に箸を突き合ッてる友達でも、女の道ばかりは敎へないもンだ、あまり敎へ過ぎて自分の鼻アを取られた談話があるからね」

「しッ、しッ」
「何だい」
「來たらしいぞ」
「誰が」
「向ふからよ、默ッてろ」
まだ起きもせず寢ながら語りし耳朶へ、向ふの門前より近づきし吾妻下駄の音、果して窓の下に止りし樣子、事に依れば川徳ばかりでなく我々二人の内にも思召あるかと、これほどの智者揃ひ、
杉浦の下女、半窓の破れ障子より差覗けば、のッぺりと黑痣の二人、言ひ合したやうに鎌首を持ち上げて、きよろ〳〵と目を剝く呵しさ、おもはず吹き出る笑ひを袖に包みながら、
「今日は、お二人の休みですの」
「夜業でしたからね」
「まアお這入ンなさい」
「有難う、ちよいと伺ひますが川田さンの、お歸りは何時でせう、いつも五時頃だと思ッて居ますが、やはり今日も、さうですか」
「いや、早い時もあり遲い時もあり、なアおい、わからないね」
「わからない、をり〳〵不意に夜業へ廻される事もあるからな」
下女は其まゝ吾妻下駄の音、また向ふへ、からこらと、二人の奴は蛇の如く持ち上げし鎌首と鎌首、互ひに捻ぢ合うて妙な面をしながら、

「なあンだい、つまらない」

午後五時、千仕の會社を出でゝ大橋を渡りし川徳、すぐ眼前に電車の便あれど、市内の交通機關は殆ど不必要の境涯、まして入谷へは遠からぬ道、ぶら〳〵と三輪より金杉の上町まで歸り來りし時、これを三島神社の片脇に待ち受けつゝ、斥候的に窺ひしは杉浦家の下女、其まゝ一散に駈け出して勝手口より走り込み、久子の部屋に慌だしく、

「お孃樣お孃樣、ちよいと出て御覽あそばせ、今あの阪本の入口を、どッかの御嫁入が通りますよ」

十八の娘に嫁入の見物、小兒に樂隊を誘ふが如く、

「あらさう」

わざと勝手口より下女に手を引かれながら、小走りに半町あまり行きし辻の角、

「おや、もう通ッて仕舞ひましたよ」

「何だね末、わざ〳〵人を呼び出して」

「だッて貴孃、お御足が遲いンですもの」

「お前の知らせやうが遲いンだよ」

かゝる伏兵ありとは知らず、ひよいと辻を曲りし川徳、おもはず立停れば、すかさず下女

「おゝ川田さン、今お歸り」

流石の川徳、不意討を食ひし顏色、阿彌陀帽子の前鍔に輕く手をかけて、已むを得ず久子に向ひ、

「昨夜は、とンだ御迷惑を、おかげで本人、助かりまして」

久子も不意討に逢ひし心地、はッと顔を赤らめて、逃げ場もなく隠れ場もなく、たゞ無言のまゝに會釋せるのみ、

その間の働き顔の下女、こゝぞと例の馬力を強めて饒舌り出し、

「川田さン昨夜まア、あンなに貴君お骨を折つて休みもなさらず今日また平生の通り會社へ、御勉強です事、御勉強も結構ですが、人と違ッて外に立派な事の出來る身體を貴君、わざと、さういふ風をなすッてさ、勿體ないぢやァありませんか、もし私の親類か兄弟でゝもあれば、喧嘩したッて其まゝにはして置きませンワ、おや、失禮、ほゝゝゝお嬢樣、この川田さンは過日も申し上げた通りなンですよ、川田さン、お嬢樣も貴君の事を聞いて、まアどんなに感心なすッたでせう、ねエお嬢樣、これで川田さンは、をりを私に冗談半分の憎まれ口を、おきゝなさるンですもの、ほゝゝゝ」

川徳も、はや堪へきれず、失敬の一言に足を早めて遁け出せば、やう〳〵に顔をあげし久子、その後姿を見送りながら、返す目元に下女を睨み付け、これも足早に歩み出す後より、

「お嬢樣、お嬢樣」

「知らないよ、もう末、お前には物をいはないからね」

「あら、なぜで御坐います」

「なぜッて、わたしを、こゝまで連れて來てさ、こンな常著のまゝで、御覽よ、頭髪も何も慌てゝ勝手口から出たンぢやないかね」

「御免あそばせ、ですがね、お嬢樣」

「何だよ、うるさい」

「さう貴孃、それでは末が困りますよ、全く、お嫁入が通ッたンですもの、あの人が來るとは、少しも存じませンので、御免あそばせ、ほゝゝゝ」

「お笑ひ、たンと、お笑ひ」

「御免あそばせ」

「お前は何でも、謝れば宜いと思ッてるのね、御免あそばせ御免あそばせと」

「でも貴孃、御免あそばせ、かうなれば末の立場として御免あそばせの外、何とも申し上げられませンもの、御免あそばせ」

ぷッと思はず吹き出せし久子、その吹き出した事が猶更ら口惜しく、口惜しけれど、また何とやら嬉しく、もし嬉しい色が顏に出るかと、すた〳〵後をも見ずに駈け出せば、叱られながら手柄顏の下女、

「お孃樣お危う御坐いますよ」

駈け出す脚下の危きのみならず、この時に於ける久子の心理狀態は、既に一種の波動を來して頗る危し、

ことし女學校の卒業前といへば、いづれも十八九、婦人の生涯また再び得難き處女の誇りを、濃艶なる色彩に包まれて、たゞ花の如しとは昔の形容詞、現代的は孔雀の羽を擴げたるが如し、

いはゆる新しき女ならずとも、今日の女子教育より來れる自然の潮流は、美術上に裸體畫を怪しまずして眞正面に打仰ぎ、戀愛を結婚の基礎として父兄に迫るの勢ひ、まして互ひに隔意なき友垣の打解けたる一室の集ひには、いつしか若き青春の血を漲らせつゝ甘き戀

を語る笑ひ聲、

けふも日曜の午後、同じ女學校の親しき五人の友、固く一室を閉め切りて、始めは罪なき事に笑ひ崩れしが、その笑ひ聲の次第に低くなりしは、いづれも遠からず我身に來るべき結婚の理想談、互ひに聲を潜めながら、

「ねエ、どんなのが宜くッて、ほゝゝゝお互ひに話して見ませうか、誰も聞いては居ないし、ほゝゝゝ」

「只、めい〳〵の理想ですワね」

「お觸りがあれば御免なさいよ、妾、一番に嫌ひなのは、お醫者樣」

「あら、嫌ひなのを、いふンぢやなくッてよ、すきなのを」

「ほゝゝゝすきな人、ありませンワ」

「いゝえ、人でないの、つまり性質と職業ですよ」

「性質は妾、さッぱりとして、男らしい、そして少しも無理をいはない、どこまでも同情心に富ンで、趣味が優美で、思想が高尚で、身體が壯健で、容貌が立派で、財産があッて學識があッて、親類も係累も何もない人でさへあれば、妾、理想に叶ッてますワ」

「あら、まア、贅澤だ事、あまり貴孃、それでは、理想過ぎますワ、今日の社會で實際、さういふ人はありませンよ、財産があれば學識がないとか、容貌が立派でも品行が惡いとか、何とかねエ」

「では今いうた内で、何が一番堪忍しよいでせう」

「妾は財産、財産は其人の力で、どうにもなりますもの」

「いゝえ妾は容貌、見苦しくさへなければ、この外の總てに代へられませンワ、つまり妾

は身體の壯健に男性美を認める考へなの、進ンでらでせう、ほゝゝゝ」

「妾は親類、親類の多いぐらゐ、かまはない事よ、親類の干渉なンか、うけるもンですか、もし喧しくいへば、此方から喧嘩して、二度と來られないやうに仕てやりますワ、ほゝゝゝ」

「もう性質だの、そンな事は止して、職業、つまり職業は何が宜いでせう」

「妾は實業家、これからは實業家の世の中ですもの」

「妾は外交官、世界的ですワ」

「妾は技術家と發明家、どッちにしませうかねエ、いッその事、鬮引で、ほゝゝゝゝ」

「妾は學者、いや學者は氣位ばかり高くて生活の度が低い事ね、では軍人、しかし軍人はいつ何時、どうなるか分りませンね、やはり官吏、というても官吏に免職があるので嫌、宗教家も今の宗教家は當にならないし、美術家、世間しらずで困るし、辯護士、理窟が多いし、政治家、名ばかりで實はなし、文士なンか猶更ら嫌、あら、かう、數へて見ると皆いけない事、ほゝゝゝ當分まア止めますワ」

この中に杉浦久子たゞ一人、始めより笑ひながら人の談話を聞くのみ、少しも口を開かねば、我お喋舌りに飽きし四人の鋒、一時に向けられて、やう〳〵一言、

「妾は、今どンな賤しい事をして居ても、前途に見込のある人、さういふ人を蔭ながら助けて、立派に成功さして見たい事よ、ほゝゝゝ」

「あら、久子さンの理想は、まるで小説のやうですワね、ほゝゝゝゝ」

月に二度の給料日、二月十四日、その半月分を請取りし痣長と白馬は忽ち有頂天、さア矢

でも鐵砲でも持ッて來いと叫びながら、おのれは織砲玉の如くに飛び出して、川徳たゞ一人、夕暮の茶漬飯に箸を取りし門口より、そッと差覗きしは相變らず例の下女、實は内心びく〳〵しながら、

「おや、もう御飯ですか」

川徳、いつになく今日は苦い顔もせず、片手を宙に呼び込んで、

「實はね、逢ひたく思ッて居たところだ、幸ひ、ちよいと這入ッて貰ひたい」

「あら、氣味の悪い事、うまく呼び込ンで置いて、欺し討をなさるンぢやアありませンか」

「よくない事をした覺えがあると見えるな、どうも變だッたよ、四日前、あの辻で、不意に出ッ喰はした工合が、あれこそ此方が不意討を食ッたンだ、しかしそれを根に持ッて欺し討するやうな、さういふ卑怯な男でない、安心して這入るが宜い」

「いゝえ川田さン、全く、あの時は考へて貴君を、わざ〳〵待ち受けた譯ではありませンよ、お嫁入が通るといふので、お孃樣がね、ほゝゝところが後で私に大變ですの、あンな内に居る常著のまゝ引き出して貴君に逢はしたといふのでね、ほンたうに困りましたワ一時ぷり〳〵御機嫌が悪くッてさ、お孃樣に叱られたり貴君に不足をいはれたり、中に立つ身の私は全體、どうなるンです、不意討どころか、私が夾み擊に逢ッてるンですもの」

「少しも要領は得ないが、饒舌る事だけは實に、うまいもンだな、そンな事は今、どうでも宜いが、あまり妙な間違ッた忠義立をし過ぎると此方よりも其方が困るぜ、はゝゝ時に呼び込ンだのは外でもない、これだ、隣家の嚊アが萬引したといふ、この品だやう

やう今日、質屋から請出したがね、かう日が經ッて乃公の手から戻すのも少々、をかしいから、お出入といへば、いくらも幸便があるだらう、手數だが、例の呉服屋へ渡して貰ひたい」

新聞に包みし中を開いて、銘仙一反と半襟三筋、また包み直して差出せば、この品と川徳の顔とを、じッと見分けし下女、

「まッぴら、御免を蒙ります、こンなものを貴君、待ッて歸られますか、それこそ大變、あれは川田さン、あの時お嬢様の電話で、もう濟ンでるンですよ」

「いや、さうでない、拘引に來た刑事にも、押し掛けて往ッた署長にも、また本人を引き取る時の警察でも、この川田徳次郎が必ず辨償しますと誓ッて歸ッた品だ、すぐ出せなかッたのは殘念だが、やう〳〵今日、出して來たよ、だが嫌なら仕方がない、面倒なら乃公が直接あの呉服屋へ戻さう」

「まア川田さン、貴君といふ人は」

「何だい」

「御用心なさいよ」

「用心しろ、どう用心するンだ」

「全くですよ、もし貴君の、かういふ氣質が知れると、猶更ら無事に居れませンよ」

「おい〳〵、そろ〳〵また馬鹿な事を言ひ出すよ」

「ほンたうですワ、今の世の中に貴君のやうな若い人で、貴君のやうな立派で正直な人がありますかね」

「はゝゝゝ正直だの立派だのといふのはね、も少し大きい事だよ、わづか四圓で出る質草

のため嘘を吐いちやァ差引、人間の勘定に合はないからさ、これでも嘘を吐いて吐き榮えがありやァ遠慮なしに大嘘を吐く男だからね、うか〳〵せずと其方で用心しろよ、はッはッはッ」

「お孃樣、これを貴孃、どう思召します」
川德より請取りし例の一品、新聞に包みしまゝを差出せば、眉を顰めし久子、
「これは、何」
「兎も角も、中を御覽あそばせ」
久子は何氣なく包みし新聞を解けば、銘仙一反と半襟三筋、その目の注ぐを待ち兼ねし下女
「これで御坐いますの、あの萬引したといふ品は、これを貴孃、あの人が今日、質屋から請出して、お出入だから幸便があるだらう、手數だが屆けてくれと」
聞くや否、おもはず小膝を進めて聲に震ひを帶び、
「末、お前、幾歳に、おなりだ、よくまァ、これを、默ッて此まゝ持ッて來たね」
「さう仰しやるだらうと、思ひまして」
「思ッたッて、思はなくたッて、もう持ッて來て仕舞ッたぢやないかね、なぜ持ッて來たの」
「お孃樣、そこで御坐いますよ、お小言を頂戴する事は充分、承知して居りますが」
「承知して居て、お前」
「ところが、お孃樣、もし屆けてくれなければ、自分で持ッて行くといふンでせう、無論あの時お孃樣の、お電話で、もう濟ンでるからと、いろ〳〵申しましたが、ねエお孃樣

今日といふ今日は私、あの人に心底から感心いたしましたよ、今日は貴孃、職工の半月分を受取る日で、どうでせう、その中から、中どころでは御坐いません、四十錢の日給といへば、やッと五圓か六圓ですもの、かういふ事は御存じのない事ですが、その中で質屋から四圓と幾何かの利子を拂ッて請出して來たンださうです、同じ家に居ても貴孃あの二人の奴、のッぺりと黑痣は早速お金を握ッて何處へ飛び出したか知りませンが、この品を傍へ置いて、たゞ一人で、ろく〳〵沸きもしない湯を冷い御飯へかけて、食べてるンで御坐いますよ、實に私、涙が滾れましたの、今日の世の中にも、あゝいふ人があるかと思ッて」

いき〳〵と張り切りし久子の兩眼も、いつしか濡れて曇りながら、

「それで、あの、萬引したとかいふ隣家の女には、緣も何もない、あかの他人だねェ」

「さやうで御坐いますよ」

「なぜ、職工なンか、なさるンだらう」

「さァ、それが、お孃樣、それだけが、さッぱり分りません、いくら尋ねても、どう探ッても、たゞ笑ッてばかし居て、すぐ冗談に紛らすンですよ」

「ふしぎだワねェ」

「全く、ふしぎで御坐いますよ」

「お前ね、何とかして、あの方の、どッか外に居なさる、お友達を、探ッて御覽よ」

「なるほど、氣が付きませンでした事、やはり、お孃樣は、お孃樣だけあッて、まァ宜いところへ、お智慧の出ました事、其お友達を探し當てた上で、つまり敵は本願寺にありで御坐いますね、ほゝゝゝ」

「あら、敵は本能寺だよ、ほゝゝゝ」

「本願寺でも本能寺でも、きツと探し當てゝ御覽に入れますよ、ところで、お嬢樣、この銘仙と半襟、困りましたね、どう致しませう」

久子それを我膝の上に取りあげて、

「わたし、これを貰ツて置きたいワ、お金は幾何でも出すから」

例の下女は外に用なく、たゞ久子一人の受持役、お傍去らずの氣に入りし上、わけて近來は、あけても末、くれても末、起きても末、寢ても末、

その下女が人しれず久子の祕命をうけて、敵は本能寺にありと絶え間なく窺ひし時、運わるく或日の晝過ぎ、一枚の端書を投げ込んで去りし郵便配達の姿、ちらと運よく門前に立ちながら見付けし下女の喜び、

加之も夜業の翌日とて痣長一人、川德と白馬は會社への不在中、

鵜の目を放ち鷹の目に覘ひし下女は、其まゝ走せ入りて再び出で來りしが、甘い奴を猶更ら甘く見ての計略、菓子を白紙に包みて袂に忍ばせ、例の無遠慮に押し込みながら、もしや間違うても栗饅頭たツた五個の損、

「今日は、お一人、お淋しいでせうね、失禮ですが、お茶菓子を持ツて來ましたよ」

ほつねンとせし痣長、いつも川德の餘慶に預りて、おのれ一人の時に茶菓子を貰ひしは今日が始めて、

「有難う、實はね、今、あまり一人で退屈だから、どツかへ何か買ひにでも出ようと思ツて居たところですよ」

みす〳〵見え透いて嘘を吐くにも頗る下手な奴、いよ〳〵面の雑作を崩せば、下女は猶更ら剛々しく、

「さうですか、そりやア宜かッた事、折角お上げしても、さういふ時は此方で大變、氣持の宜いもンですよ、ほゝゝゝしかし毎日、なか〳〵お草臥でせうね、よくまア身體の續く事」

「續いても續かなくッても、仕方ありませンよ、出なければ食へないといふ、なさけない境涯だ、はゝゝゝ」

「だッて世間には、出るにも出られない人が、あるぢやアありませンか」

「まア、さうでも考へて、諦めるンですな」

「人間は萬事、思ひやう一個ですよ」

「全くだ、しかしね、をり〳〵は嫌になッて、その思ひやうが三個にも四個にも、仕舞には、めちや〳〵になりますぜ、どうしたら宜いかと思ッてね」

「でも男に生れたのは生涯、どれほど徳か知れませンよ、くさくさして氣の結ぼれた時なンか、女で御覽なさい、たとへ自由な身體でも、お金があッたところで、お芝居を見るか、おいしいものを食べるのが關の山でせう、そこは男で、ちよいと醉ッた勢ひに、すきな眞似が出來るぢやアありませンか、また誰でも氣の合ッた友達といふものが女の友達と違ッてね、お樂みは格別ですもの、ほゝゝゝ」

「なるほど、さういへば、さうだ」

「かうして三人、暮して居なさるのが何よりですワ、氣が合はなければ、かうして居れませンもの、無論また別に、めい〳〵外の、お友達もあるでせうが」

「そりやァね、外にも隨分ありますよ」
「あの川田さンなンかも、あるンでせうね」
「ところが、あれは少々、變りもンですからね、あれだけ會社に仲間が多くッても、あまり親しくするのはないやうだ、をり〳〵本郷へ出かけますがね、現に今も、その本郷から端書が來ましたよ」
「おや、さうですか、本郷に」
「たしか本郷で、何丁目か知らないが、これだ、これですよ」
「あら、ちよいと拜見、おや、處も番地もなくッて、たゞ名前だけ、加之も妙な名前だ事これは紫といふ字でせう、そして下が影、紫影、をかしい事ね、ほゝゝゝ」
「妙に川德は自分の身の事や友達の事を、いはない男だから一切わかりませンがね、これに違ひない、をり〳〵出かけて行く本郷これだ、文句は明晩、是非とも來てくれといふンで」
「紫の影ッて、何でせうね」
「さァ、符牒だらう、はゝゝゝ」
聊か物足らねど、本郷といふ事、明晩は是非とも來てくれといふ事、その影を見えがくれに隨けて行けば必ず緒を引き出すべしと、もはや痣長に用のない下女、
「お邪魔いたしました」
「まァ宜いぢやありませンか」
「いえ、ちよいと御用の時間ですから」

いはゆる巧を拙に藏するの意味、いまだ社會に出でざる川徳が今の身に、打ち解けし竹馬の友は本郷の泉谷紫影たゞ一人、逢へば互ひに蟹の如く泡を吹いて喧嘩半分の議論に夾み合へど、逢はざれば何とやら懐かしく物足らぬ心地、諺にいふ世間の碁敵に似たり、

その泉谷より是非に來てくれとの端書、加之も幸ひ夜業の翌日、聊か早目に夕飯を濟してまだ晝飯のまゝに横たはりし白馬を見返りながら、

「おい〳〵、いつまで寢てるンだ、いくら夜業があッたにしろ、もう起きろよ、立ッて働く人間が、あまり横になり過ぎると折角に立ちかゝッた運まで横になるぜ」

「横でも斜でも宜いや、立ッて居て運が來りやァ電車の旗振と立ちン坊は無くなるよ」

「なるほど、さういふ理窟で果報を寢て待つンだな、や、よからう、時に乃公は、ちよいと出てくるからな、今に痣長も歸るよ、また二人で的のない女の噂でもするさ、はゝゝゝ」

笑ひながら立出でしは午後四時過ぎ、まだ春とは名のみ、六時に暮るゝ日脚を横に浴びて入谷より阪本町を上野の山下に添ひ、ぶら〳〵と急がぬ廣小路を右に切通しの坂、上より馳せ來る俥を避けて、ふと何心なく振り返れば、二三間の背後に杉浦家の下女、見付けられて今更ら遁げ場もなく、はッと思はず立往生すべきところを此女、づう〳〵しく落著いて即座の愛敬を浮べ、馴々しく小走りに近寄りながら、

「どうも後姿の能く似た方だと思ッて居ましたよ、どこへ往らッしやるの」

面倒な女に出喰したと思へど、蹴飛ばしても行かれぬ川徳、眉を顰めながら、

「ちよいと本郷の友達を」

「あら、私も、お嬢樣の御用で本郷まで、本郷は川田さン、どちらへ」

「つい、そこだ」

「つい、そこでは分りませンワ、本郷の貴君、どの邊」
「どの邊でも宜いぢやァないかね、元も角も一歩お先へ、失敬、急ぐンだ」
家鴨のやうな奴、迚も走れまいと、俄に足を早めて大股に歩み出せば、まン圓い身體を案外の身輕に運ンで、ちよこ〳〵と隨いて來るのみか、五六間を隔てば忽ち背後より無遠慮に川田さン川田さン、きかぬ振して其まゝ行けば呼ぶ聲ます〳〵高く、加之も往來の中央、流石の川德も面を皺めて立停り、
「おい、ふざけては困るよ、冗談ぢやァない此方は急ぎの用があるンだ」
「ですから別に御用の、お邪魔いたしませンワ」
「いたしません事があるもンか、大に致してるよ、この往來で食ひ遁げでも追ッかけるやうに何だい、川田さン川田さンと、外聞の惡い」

「まァ酷い事、さう貴君、私に呼ばれて、外聞が惡う御坐いますか」
「よくないよ、默ッてでも來れば、まだしも、時に乃公は本郷の二丁目までだが全體、そッちは何處へ行くンだい」
「あら、まァ、妙ですね、いやでも御同伴ですよ、この私も本郷の二丁目」
「ぢやァ仕方がない、氣の毒だが、なるべく離れて物をいはずに默ッて歩いてくれ、人が見ると」
「人が何と見ませう」
もはや相手にせず、其まゝ無言に急いで本郷二丁目、泉谷紫影の下宿屋、門口を這入りがけに振り返れば、一間ばかり後れし足を早め來りて、
「此方ですの」

川徳、敵に追はれし如く其まゝ遁げ込んで、泉谷の部屋に入れば、待ち受けし紫影、

「やァ濟まない、これは僕の方より出かける用だがね、當分の間はくるなといふから已むを得ず來て貰ッたンだ」

「何だい、全體どういふこッた」

「實はね、困ッた事が出來たよ、君の知ッて居る通り國の方は兄が居るから、つまり僕は家に取ッて入らない人間だ、ところが急に歸ッて來いといふ手紙が來た」

「たゞ歸つて來いぢやあるまい、どういふ理由だ」

「どうも田舍氣質は困るよ、いはゆる分家といふ古來お定まりの有難迷惑でね、兩親も兄も僕に一言の相談なく極めて仕舞ッたらしい、まづ先決問題が嫁を取れといふンだ、幸ひ何處とかの娘で今年二十歳になるのがあるから、それを迎へて分家しろといふのさ、結局この僕を東京から引戻して、生れた村の中で僅な田地を生命の綱に取り外さぬやう、無事に朽ち果てろといふ註文だ、はゝゝゝ」

「考へて見てくれ、今更ら草深い片田舍へ歸ッてさ、どンどろ阪の田吾作や杢兵衛を相手に無意味な生活が出來るかね、おまけに生涯の妻は良人たるべき僕の撰擇を許されず、勝手に極めて仕舞ッて、さァ持て、そら迎へろといふ難題だ、いや、古い頭で古い田舍の習慣に囚はれた親や兄は難題でなく寧ろ僕に對する愛の極かも知れないが、僕としては頗る苦痛の極だよ、せめて村長さンになるのを名譽と心得たり郡長を凹まして快を叫ぶやうな低級人間なら、また思案の仕直しもあるがね、いやしくも思想界の自由を我物として文學の靈光に生きつゝある僕が君どうして歸れる」

「手紙の返事、まだ出さないのか」

「その返事に付いて、君に來て貰ッたんだ、こゝは竹馬の友たる君を煩はすの外に策なしだ、いくら僕が立派な議論を吐いても説を立てゝも到底、無效だからね、一應まづ親も兄も能く知ッてる君から返事を出して貰ひたい、つまり僕が今更ら田舍へ歸ッて心にもない分家をしたり嫁を取るよりも、此まゝ東京に置いて本人の希望を遂げさした方が宜いのみならず、それが偉大なる人生の意義たると共に、また他日に於ける親や兄に大なる孝行だといふ事を、わかるやうに委しく書いて、送ッて貰ひたい、たとひ承知しなくッても君に對して、さう急に迫ッては來ないだらうと思ふ、其うちに僕も亦、考へがあるからね、もはや時代に伴はない社會の舊思想や舊道德を打破するは一言の下にあるが、さて鎭守の神主と旦那寺の和尚に仕込まれた惡堅い親や兄を説破するのは、なか

なか面倒で手數が掛るよ、はゝゝゝゝ」

兩腕を組んで兩眼を閉ぢながら無言に聞き居たりし川德、その腕を解き、その眼を開き、屢し泉谷紫影の面上を打戍りしが、急に首を横に振ッて、

「いやだ、その返事を僕の手で出す事、まッぴら御免蒙らう、僕は君の親と兄に大贊成だ、全體まア君のやうな人間が月々の下宿料に責められながら、ぐづ〳〵この東京に居て何になるい、さう聞いた以上、いよ〳〵嫌だ、寧ろ僕は君を田舍へ引き摺ッて歸る覺悟だ」

同年同時に同鄕を出でし竹馬の友、その父兄より歸れといふ手紙の返事を賴まれて首を横に振りし川德、案外に呆れし泉谷紫影の面上を猶更ら射るが如くに睨みながら、

「おい泉谷、よく考へろ、文を作るより田を作れといふ諺は、正しく今日の君に對して

遺憾なき名言だぞ、なるほど古い頭で古い田舍の習慣に囚はれた親や兄から突然この東京で五六年も居るものに向ッて、一言の相談もなく勝手に極めた分家や嫁取の相談を强ひるには、いかにも無理のやうだが、そりやァ君その壓制に應じられない人にして始めて多少の抗辯も出來るし不服も言へるンだ、君は全體、どういふ立派な抗辯と不服を唱へられる、今日に限らず、いつも逢へば必ず喧嘩腰になる僕の論點は、そこだ、藪蚊の啼くやうに明けても暮れても君か文學々々といふ、その文學が何だい、禮法の外に逸した事を得意とする東洋流の放縱な質の惡い文士肌へ、國家も社會も周圍もない空想的な不健全な西洋の文學趣味を鵜呑みにして、おまけに其本人が君のやうな肉體も精神も、ひよろ〳〵と中心點のない薄弱な人間の隨喜し耽溺し中毒したのが、いはゆる今日一般の文學なるものだ、加之も不思議に泣蟲の寄合で、ちよいとした事にも直ぐ悲慘だの苦痛だの煩悶だのと、泣く外に藝がなくッて年が年中、べそ〳〵泣いてばかり居るぢやァないか、たま〳〵嬉しがれば、奴さン、また夢中でろくでもない、女を天女のやうに崇め奉ッて、いや戀だの愛だの生命を捧げますのと、あの騷ぎは、どうだい、馬鹿々々しい、も少し世の中の方角でも見定めた上、うぬが頭と脚下に氣を付けて四邊近所へ御迷惑の及ぼさないやう、そろ〳〵歩くが宜い、つまり今日の文學に泣く奴も嬉しがる奴も、あまり小さ過ぎるよ、あまり狹く居縮み過ぎるよ、わけて君の如きは、もはや精神に異狀を來してるぞ、いはゞ文學中毒の大病人だ」

横に首を振ッて手紙を書かざるのみか、眞正面より嚙んで吐き出す如く罵倒せし上、精神に異狀ありとまでいはれし泉谷紫影、おもはず青い顏を赤め痩せたる膝を進め、

「おい川田、いやなら嫌で宜い、まだ文學を解せない頭腦で文學を罵ッて笑ッても宜いが

この泉谷を精神に異狀あるとは、どう異狀ある」

「はゝゝゝ氣狂ひで自分の氣狂ひを知つてゐるものはない、僕から見れば、確に異狀あるンだ、親友として捨てゝ置けない、ぐづ〳〵この東京で下宿料に責められながら文學中毒の熱病に浮かさるゝよりは、父兄のいふ通り一日も早く田舍へ歸ッて安樂に清潔な空氣を呼吸しろ、つまらない本を讀ンで下らない著述なンかに苦勞するよりは、どンどろ阪の田吾作や李兵衞に同化されるのが君のために人生の最大幸福だ、實際また神聖の文學も詩歌も君、僞りのない彼等の雜談と罪のない彼等の野良唄にあるンだぜ、いくら君が高尚めいても優美めいても無效だ、君に賴まれて君のため此まゝ東京に止まる辯護的手紙は書かない、斷じて應じないが、無理に田舍へ呼び戻して分家嫁取の一件大贊成の手紙は今夜、すぐに書いて君の阿父と兄へ出すからね」

「川田、おい川田、もし僕と君と替ッたら、どうする」

「僕か、僕は分家や嫁取ぐらゐで東京を去れない、鋤鍬を持たざるかぎり我國の主府は動かれない、さし當り眼前に早い談話が職工になッて四十錢の日給、あの村で取れるかい、はゝゝゝしかし泉谷、君は田舍へ引ッ込むべしだぜ、第一その弱い瘦せッこけた身體で、へぼ文學の毒に中つて夭死するよりは幸ひ父兄に迎へらるゝ田園生活の自然美を樂ンで長生しろ、いや明日また來よう、よく考へてくれ、兄弟もない僕の身として此東京に居る竹馬の友は、君たゞ一人だぜ、無理にも引止めるのが當然だよ」

泉谷紫影の文學趣味を糞糟の如くに踏み潰せし川德、これが世間普通の友人ならば、既に絕交、もはや再び逢はぬ筈なれど、その翌日の午後五時に工場より歸り來りて夕飯を食ふ

や否、のこ〳〵また本郷の下宿屋へ、
實は昨夜の罵倒、あまり藥が强過ぎたかと思へど、わざと氣の毒な顏もせず、平常よりは
猶更ら荒く部屋の障子を引開けて、
「おい、どう考へた、どう極めた、田舍へ歸るのか歸らないのか、一刀兩斷、はッきり返
事しろ」
念のため今夜また來たぞと坐り込みし勢ひ、泉谷これを迎へて逆擊するかと思ひの外、く
す〳〵と笑ひ出せば、流石の川德も聊か拍子ぬけの體、
「何が呵しい」
「別に大して、さう呵しくもないがね」
「呵しくなくッて、笑ふ奴があるかい」

「だが少々、呵しい」
「少々、呵しいとは何が少々、呵しいンだ、平生の冗談と違ッて、いはゞ貴樣の生涯に關
する大切な分岐點ぢやァないか」
「それは承知してるよ、承知してるがね、やはり呵しい」
「どうかしたな此奴」
「僕よりも川田、君の方がどうかしてるよ」
「乃公が、どうした」
「どうッて、はゝゝゝ來たぜ、いよ〳〵來たぜ」
「來たとは何が來た」
「あれがよ」

「あれで分るかい」
「女が來たよ」
「おい、こら、泉谷」
「おいでも、こらでも仕方がない、實際に來たンだ、昨夜、君が歸ると入れ違ひに直ぐ這入ッて來て、川田さンの御朋友に逢ひたいといへば、僕だらう、ところで逢ッて見ると、いろ〳〵君の事を聞いたよ、第一あの方は今、どういふもンで職工なンかになッて在らッしやるンでせうと、それが君に對する唯一の疑問で僕に對する唯一の質問らしい、はゝゝあまり美人でもないが流石に君の撰擇だ、いくら婦人の體育が喧しい今日でも、あゝ丸く太く思ひきッて立派に出來た女は珍らしいよ、加之も初對面に拘らず、のべつ幕なしに喋々と饒舌り立てる工合、いかにも快活だ、はゝゝゝ」

始めは不審の眉を顰めて聞き居たりし川德も、ぷッと思はず吹き出して、左官の壁を塗るが如く兩手を宙に振りながら、
「やァ、とンでもない、そりやァ君、はゝゝゝ君、ばゝ馬鹿にするない、ありやァ君、乃公の向ふに住ンでる杉浦といふ家の下女だよ、下女も下女、たゞの下女と違ッて、頗る調子外れに相手かまはず、づう〳〵しい女だよ、實はね、昨日こゝへ來る時、途中で出喰して、さンざ惱まされたンだ、しかし君のところへ押し掛けて來るとは、思はなかッたね、ふゝン、彼女、來やァがッたかい、こりやァ驚いた」
「ぢやァ別に何も、關係がないのか」
「あッて堪るかい、はゝゝゝ」
「だが、神田の錦町の佐藤の二階に居ッた事も、辯護士の資格ある事も、つまり今の君

として寧ろ人に話さない事を彼女、よく知ッて居たぜ」

「そりやァ元、佐藤の親類に奉公して居たンださうだよ、實は泉谷、近頃、うるさい事があッてね、つまり彼女の現在、やはり奉公してる杉浦といふ家に、いや、止さう、馬鹿馬鹿しい、はゝゝゝ」

「馬鹿々々しくッても事實なら、宜いぢやァないか」

「なァに、馬鹿々々しいにも程度がある、實は今夜こそ、うンと貴樣を押へ付けて、いよいよ田舍へ、追ひ歸さうと思ッて來たンだが、つまらない女の飛入で、氣が拔けて仕舞ッた、かうなると妙なもンで、いくら名論を吐いても權威がないからな、はッはッはッ、何だか變挺だ、また出直して來る、さよなら」

元來あの虛弱なる不健康の身體に、天生あの過敏なる不眠症の神經質を以て、いはゆる今日の文學者たらしむる事、文學そのものゝ價値は暫く措いて、あたら竹馬の友たゞ一人この東京へ捨て殺しにするが如し、幸ひ故鄕よりの呼び戻しは彼のため田園生活に蘇生の靈光、たとひ摑み合うても今夜こそと、逆化折伏の勢ひに押し寄せしが、くす〳〵と笑はれし例の飛入一件に腰を折られて、おもはぬ不意の拍子ぬけに歸り來りし川德、入谷の夜は猶更ら淋しく、薄闇き近路を縫うて杉浦家の横に出でしが、煉瓦塀の角を照らせる瓦斯燈の下に女の立姿、ふと見れば例の下女、

や、畜生、また根氣よく出て居やァがるなと思へど、こゝより外に歸るべき道なく、こゝに待ち受けて網を張る樣子、今更ら後へも戻れず、餘儀なく近づけば、

「おや、川田さン、今お歸り、昨日は途中で、とンだ失禮を致しまして、さぞ御迷惑で御

坐いましたらうね、ほゝゝゝ」

川徳、舌鼓を打ちながら、うッかり怒ッて喧嘩も出來ぬ相手、もし賣言葉に買言葉となれば大變、搦めば搦むほど猶更ら蒼蠅い女、いかなる因果か、どうしても此女には叶はぬものと觀念して、なるべく鋭鋒を避け、

「おい〳〵、失禮も宜い加減にしてくれ、さぞ御迷惑と承知して居りやァ、も少し考へて貰ひたい、あまり手酷く遠慮なしに、ふざけ過ぎるよ、しかし全體まァ、今ごろ、そこに何を仕てるンだい、はゝァ、色男でも待ッてるンだな、お邪魔しては濟まない」

其まゝ素早く遁け出さんとすれば、どッこい、張り切るやうに肥り返ッた十七貫の大女、わけて狭く細き小路の中央に立塞がり、

「あら、私に色男なンて、うまい事ね、その術は食ひませンよ、ほゝゝゝ」

「どの術か知らないが乃公は急ぐンだ、こンな薄闇がりで立談は困る、用があれば家へ來てくれ」

「家へ來てくれッて家には貴君、いけ好かない、あンな妙な顔が二個も竝ンでる中で話されますかね」

「いけ好かない妙な顔でも、ありやァ生來だ、別段お世話にならうとも、いふまいよ」

「さう川田さン、さう貴君のやうに、木で鼻を括るもンぢやァありませンよ、憎らしい、ほンたうにまァ貴君は、情のない方ねェ、いくら何だッて、それでは貴君、あンまり冥加が悪いでせう、私なンか此まゝ夜通し立往生させられても構ひませンが、おかはいさうに、考へて御覽なさい、あれほど思ッて居らッしやるンですもの」

そろ〳〵露骨の無遠慮に本音を吐き出されて、川徳ます〳〵閉口、頓首再拜せんばかりに

困り果てし一時の窮策、

「ぢやァ明日、午後からね、幸ひ日曜で二人とも飛び出すからね、わざと僕だけ居殘ッて何か知らないが兎も角、ゆッくりと談話を聞かう」

「では今夜、これで許してあげませう、ほゝゝゝ」

「許してやる」

「さうですワ、私、今夜は貴君に二擊や三擊ぐらゐ、きッと擲られる覺悟でしたの、まァ宜かッた事」

づう〳〵しく大膽に落着いて居た筈、擲られる覺悟で待ち受けしと聞いて、いかなる敵にも恐れぬ川德ながら、流石に驚いて薄氣味わるし、

まさか本人あれほどでなくとも、殆ど敎唆的に調子づいた橋渡しの彼女、あの勢ひで圖に乘れば、ます〳〵前後無差別に何を仕出來すやらと、

きのふは本鄕へ行く途中を惱まされ、けふは本鄕よりの歸りを待ち受けて惱まされ、加之も手痛く念入に要擊されし川德、はふ〳〵の體に我家へ近づけは、ちよこ〳〵と薄闇がりに遁げ去りし影を追うて門口まで飛び出せし痣長の吐鳴り聲、

「この盜賊猫めッ」

「何だい跳足で、猫かい」

「なァに猫ぢやァない隣家の餓鬼だよ、やう〳〵まだ七歳か八歳だが油斷のならない太い奴だ、實は今、白馬も居ないし、あまり淋しいから餡パンを買ッて來たが急に便所へ行きたくなッて、つい袋のまゝ上り口に置いて駈け込んだのさ、それを猫のやうに門口か

ら覗ッて居やがッたんだらう、ちよいと摑ンで」

きくや否、川徳、思はず兩手に痣長を押し戻して其まゝ家に入りながら、ぽッと射す五燭の電燈に透して見れば、あはれや小さい手に摑み損ねしか破れし袋より餡パンの轉げ出でし數、

「おい痣長、幾個、買ッて來た、」

「錢の都合でね、九個」

「一個二個三個四個五個、やアこゝに二個、こゝにも一個二個、合して九個あるぢやアないか」

「便所から出るなり吐鳴り付けて追ッかけたので、はゝゝゝ驚いて其まゝ遁げたンだらう、しかし行末あゝいふ餓鬼は、ろくなもンにならないぜ、第一に親が惡いンだらう、親も阿父の方は長らくの腰ぬけ病人だが、母親の質が善くないからだね」

「さう大きな聲をするない、壁一重だ」

「壁一重だッて、盗賊だから盗賊といふンだ」

「しかし一個も盗ンで居ないぞ、默ッてろ、かはいさうに、まだ頑是ない小兒だ」

轉げ出せし餡パンを拾うて、別の古新聞に包みながら立出でむとするを、

「川徳、どうするンだ」

「どうもしない、隣家の小兒に遣ッてくるンだ」

「じよ、冗談ぢやない、乃公が買ッたものを盗賊する餓鬼へ、わざ〳〵遣りに行く奴が」

「吝な事いふな、腹の空いた小兒に罪があるかい」

折しも壁を隔てゝ俄に洩れ來る小兒の悲鳴、ぴし〳〵と打ち叩く音、川徳、たまらず飛び

出して隣家の入口より差覗けば、まッ黒に燻れるカンテラの火影うす闇き中に、病める父も這ひ出して泣き母は猶更ら泣いて我子の折檻最中、

「おい〳〵まア待ッた、ぶッたッて仕様がない、よく言ひ聞かしてやりなさい、さア欲しい餡パン持ッて來たぞ、小兒だよ小兒だよ」

そのまゝ抛げ込んで後を見るに忍びず、また直に戸外へ飛び出せし川徳、

思へば無慘なる人生の悲慘、たとひ一時の出來心にせよ、あの母親に萬引せしめ、また行末を呪へる運命の闇黑、たとひ飢ゑたるにせよ、その子に盜みを教ふ、

わづか壁一重の隣家に現在の生地獄ありて、つい一歩の前に浮世の春を含みし杉浦家の大門、いかなる闇夜の暴風雨にも消えざる電燈の光り煌々として白晝の如し、

二十日以前に銘仙一反と半襟三筋のため、その母親の不運に涙を注ぎ、前夜は餡パン九個のため、その子の悲慘に打たれし川徳、けふは日曜なれど平生よりも早く起きて、默然と腕を組みつゝ坐せる體を、寢ながら横目の白馬、

「おい川徳、この休日に朝ッぱらから飛び起きて何を考へてるンだ、午後から淺草へ活動へでも出掛けようぢやないか、たまには一處に交際へよ」

同じ枕の痣長も鎌首を持ち上げ、此奴また何か吐すかと思へば、

「前夜の餡パン九個ありやアあのまゝ乃公の損になるンかなア、つまらない」

川徳、さも冷かに首を捻りて、さも淺ましげに二人の面を見返りながら、抛げ出すが如き言葉、

「揃ひも揃ッて天下泰平に出來てるよ、淺草の活動寫眞、なるほど面白いだらうが當分ま

ァ交際は御免だ、餡パン九個あれは痣長、五厘づゝだから白銅一枚で不足あるまい」

「なァに四錢五厘で宜いよ」

前夜の餡パン代を今朝すぐ寢ながらの催促、いかにも癪に觸れど、それを四錢五厘で宜いとは、正直に罪も憎氣もない奴、

「遠慮するな、一夜の利息を付けて五錢、出すよ、はゝゝゝ」

おもはず笑ひながら、また腕を組んで考へ込めば、流石の暢氣者も聊か氣にかゝりし樣子、

「何か心配でもあるのか、心配がありやァ隱さず話してくれ、かうしてる以上、お互ひだ、なァ白馬」

「さうだとも、一人で考へるより三人で考へりやァ、きッと宜い智慧が出るよ、そこが友達といふもンだ」

此奴等二人の智慧で及ぶ事、この川徳が腕を組むものかと思へど、靜に首肯いて、

「いや、さう氣を揉ンでくれるほどの事でもない、ちよいと只、考へて見たのさ、乃公に構はず二人で今日は面白く遊ンで來るが宜いよ」

この時この川徳の頭腦には、まづ本郷の泉谷紫影、あれを都門の塵に埋めず首尾よく說き伏せて田園生活の自然美に歸らしめんとの工夫、また壁一重の隣家に哀れ其日の食も得ざるため罪を犯し易き一家四人の親子、いかにして現在あの悲慘なる運命の底より救ひ出さんかとの工夫、さらに近來ます〳〵無遠慮に圖太くなりし杉浦家の下女、うか〳〵すれば我身の前途に意外の面倒を起すべき恐れあり、どうして彼女を二度と再び來ぬやうに追ひ拂はんとの工夫、

自他ともに以上三件、これを現在四十錢の日給に自己の身を養ふ境遇より一時に遺憾なく解決せんとする川徳、おもはず眉を顰めて腕を組む筈、

その傍らより、痣長と白馬の二人、のそ〳〵と夜具を這ひ出して、互に珍らしくもない顔を見合せながら、

「おい今日は活動の方を止めて浪花節を聽かうぢやないか」

「さうだな、ぢやァさう極めよう」

天下泰平の白馬と痣長は、けふの日曜を幸ひ、ます〳〵お目出たくなりて淺草へ浮かれ出し、後に殘りし川徳たゞ一人、

本郷の紫影と隣家の救濟と我身の厄拂ひ、この三件を今日中に遺憾なく加之も現在の境遇より實際に出來得る程度に於て最善の方法を講ぜんとす、殆ど不可能に似たれど、その不可能は正に我みづから我を試驗の好問題、

煤けたる破壁に背を凭せ、まッ黑の天井を白き半眼に睨み上げて、頻りに腕を組みつゝ思案に耽りし頃は　お目出度い二人の奴、あンぐりと口を開いて、活動寫眞か浪花節に夢中の頃、

白馬と痣長の夢中は川徳に何の關するところなけれど、機を窺ひ時を覘うて押し寄せ來る例の大敵、あの下女の夢中は捨てゝも置けず、さしづめ今日の防禦線、いかに張らんと思ひし門口へ、はや既に其足音、

「おや川田さン、お一人、昨夜は失禮」

昨夜に限らず、いつも失禮ばかりの女、今日こそはと待ち構へし川徳、わざと微笑を浮べながら、

「よくまア、さう勝手に出られるよ、奉公して居ながら、よほど巧く主人を誤魔化してるらしいな」

「あら、人聞の惡い、そンな横着女と見えますか、私は川田さン、お孃樣だけの御附で、お孃樣さへ、お小言を仰しやらなければ宜いンですの、ですから私　お孃樣の事といへば、どンな業でも藝でもしますよ、お芝居の侍がいふぢやアありませンか御馬前の討死、ほゝゝゝ」

づう〳〵しく無遠慮に押の强い筈、前夜は擲られる覺悟で横町の闇がりに網を張り、今日は討死の覺悟で眞晝に堂々と押し寄せる女、ま〻〳〵以て油斷大敵と、川德、おもはず苦笑ひ、

「たまらないなア、その勢ひだもの、はゝゝゝしかし忠義も忠義に依るぜ、あまり變に妙な忠義を盡し過ぎると、自分は天晴れ手柄の考へでも結局、お主のためにならないよ、世の中には忠義立ての立て損ひで、却ッて主倒しになる事が幾何もあるからなア」

射るが如き眼光、じろりと睨めば、睨まれたぐらゐでは平氣な女、

「川田さン、そんな皮肉な事をいふもンぢやアありませンよ、わざ〳〵私　今日は貴君に叱られたいと思ッて來ませンわ、ほゝほゝ」

「だが、まさか譽められようと思ッても來まい」

「いゝえ、譽められる心算で伺ひましたよ」

「譽められる心算だア」

「ですとも、考へて御覽なさい、これほど氣を揉ンで心配して一所懸命に働いてさ、不足をいはれる筈がありますかね、現に過日も途中、あの時なンぞ、まるで乞食か物貰ひで

も隨いて來るやうにいはれながら本鄕の貴君、お友達まで見屆けに行く私でせう、これが一時の洒落や冗談で出來ますか」

そろ〳〵夢中になりかゝりて、自他の分別も主客の差別もなく、めちや〳〵の一本調子に猶更の念を入れ、

「實は自分の親の家だッて無沙汰してる私ですよ」

流石の川德も呆れて暫し其顏を打戍り、

「おい〳〵、ちよいと待ッた、そりやア全體、誰にいふこッた、誰が見屆けてくれと賴んだ」

「賴んだッて賴まれなくたッて、もう貴君、往ッて仕舞ッたぢやアありませンか、今更ら取返しが付きますかね、すぎた事は過ぎた事として川田さン、これから改めて私、今日は貴君に、篤と伺ひたい理由が御坐いますの」

さア、いよ〳〵事となりにけり、この上この流で篤と伺はれる川德の災難、

智慧は智慧を以て勝ち、道理は道理を以て勝てど、智慧にも道理にも行かぬ相手、まさまます呆れし川德の前に遠慮會釋もなく、いよ〳〵馬力を加へて例の一本調子を持ち出せし下女、加之も今日は討死の覺悟といふ前觸、

「ねエ川田さン、どうせ貴君も生涯お一人ぢやア御坐いますまい、お持ちなさるンでせう、奥さンを」

うッかり物もいはれず、默ッて無言の苦笑ひ、

「お持ちなさるとすれば、するンでなく是非、お持ちなさるとして、どンな奥さンが貴君、お氣に召しますの、いくら緣でも、まさか私のやうな、こンな女は、お嫌でせう」

知れた事いへ、そンな厚顔しい譯の分らぬ無鐵砲な女、誰が持つかと思へど、なほ無言、

「神田の錦町で佐藤の二階に居らしッた事を私、知ッて居ませう、その貴君が何故、今、こンな職工なンか、なさるかと思ッて、それが第一の不思議で實は本郷の、お友達を突き止めて、ぶしつけですが、いろ〳〵と伺ッて見ましたの、ほゝゝゝ」

もはや根くらべの川德、饒舌るだけ勝手に饒舌らした後で最後の一擊、ぐわンと喰はす料簡、

「伺ッて見て私、始めて分りましたよ、泉谷さンと仰しやるのね、あの方、其お言葉に、川田が日給四十錢の職工となッてるのは無論、職工が目的でもなく、また食へないためでもない、あれは頗る希望の大きい男で、ずッと前途に深い考へがあッて、わざと今、あゝしてるンだ、加之も天生の强情で、前途の考へは決して誰にもいはないが其いはないところが川田だと、かう仰しやいましたよ、して見ると貴君は世間を馬鹿にして人の目を眩ましてるやうなもンですね、わざと毎日あンな汚れた襤褸洋服を着て、なンにも知らない顔で、こつ〳〵工場へ通ッて、くだらない事をして居ながら、だしぬけに世の中を驚かしてやらうといふンでせう、まア人の惡いこと、萬事その調子ですもの、私だッて困りますワ、うか〳〵貴君のいふ事は眞に受けられませンね、もし口で嫌といへば、その實、嫌でないと思ッて差支ないのでせう、總てが反對、さう極めて仕舞ひますよ川田さン、ほゝゝゝ」

さう極められては堪らぬ川德、總ての反對は猶更ら、もはや口を一文字にしても居られず、

「べら〳〵と能く饒舌るが全體まア今日は、どういふ用で來たンだい」

「どういふ用、わかッてるぢやァありませンか、わかッて居ながら、わざと恍けて、わからない顔をなさるよ、やはり今の流ですね、憎らしい」

「おい、冗談なしに用をいへ用を」

「どうしても、いはなければ、なりませンか」

「いはずに知れるかい」

「では申しますよ、實はね、川田さン、大變ですの、そりやァ貴君、大變ですよ」

「何が大變だ」

「お孃樣が」

「急病か、急病なら大變だ、主人の大變を捨てゝ用もないに饒舌ッてる女があるかい、狼狽へて醫者の家と間違ッたンだな」

「いゝえ、間違ひませンよ、外のお醫者で貴君、あの大變な病氣が癒りますかね」

川德、はッと思はず、しまッた、

人しれぬ情の橋渡し、戀の取持を第一の忠義と心得たる下女、ます〳〵無遠慮に自己の料簡違ひを押し出して、

「川田さン、全く貴君ァ德な方ですよ、お名前も德次郎さンですが、人間は自分の名前通りに行くもンぢやァありませン、現に私の知ッてる富田金吉といふ人が年中、びい〳〵の一文なしで淺田といふのが至ッて我利々々亡者の慾の深い奴、お春といふのに絶えず陰氣な沈ンだ病身があッて、お幸といふ友達が貴君、容貌も美し恰悧でもあるに、どういふもンか、する事、なす事、少しも善くなりませンの、雨後の阪でも辷り落ちるやうに下の方へばかり惡くなつて、かはいさうに今では四人も子のある露店商人の後妻にな

ッて居りますよ」

「なンだい、まるで下手な姓名判斷の受賣だな、はゝゝゝゝしかし川田德次郎といふ乃公が何故、名前通りに德な人間だ」

「德な方ですワ、あゝいふ立派な御家に生れた大切な一粒種で、どこに一點の不足も瑕瑾もない、お孃樣が貴君、あけても暮れても只その事ばかり思ッて、わるく申せば氣ぬけのやうに、ぼうッとなさるンですもの、いえ始めの間は、まさか、あゝでもなかッたンですよ、ところが近來、ほンたうに困りますワ私、それこそ全く、御病氣にでもならなければ宜いと心配して居ますの、もし御病氣になれば川田さン、罪は免れませンよ、いくら卑怯に遁げても貴君が毒を盛ッたやうなもンですよ、考へて御覽なさい、世間の當然は男の方から騒ぐンでせう、さンざ氣を揉ンで、お金を費ッて、いろ〳〵と機嫌を取ッて、それで女のために殺される人の多い中に、まア何といふ貴君は德な方です、それも貴君が充分に腕を出して、これ見よがしに世の中に立ッた曉なら兎も角、失禮ですが今は誰が目も同じで、どちらかといへば、あまり人好きのしない其日暮しの職工ですに、その垢染みて汚れた襤褸の職工服が、お氣の毒だとか、おいとしいとか、いや男らしいとか、尋常の人でないとか、あゝいふ方を蔭ながら助けてあげたいとか、まだ世間の何事も御存じない十八の、お心から、それほど貴君を思ッて居らッしやるンですよ、それほど思はしたり惱ましたり、ぼうッとさしたりする貴君が、それで濟みますかね、此頃では川田さン貴君の噂をするにも、よほど考へないと、うッかり出來ませンの、ちよいと變に口が辷ッて川德なンかといへば、さア大變、あの貴君お優しい目が急に變ッて、じろッと睨む時の怖い事、おまけに一日、ぶり〳〵と物も仰しやらずに、ですから

私、それ以來、決して貴君の名をいひませンの、あの方、ほゝゝゝお孃樣の前では、あの方で通して居ますよ、ところが此あの方、かういふ木佛金佛では困るぢやァありませンか、中間に夾まれた私を全體、どうして下さるンです、今日こそ川田さン、いつものやうに口端ばかりに追ひ拂はれて歸りませンからね、その御覺悟で」

べら〳〵と油紙に火の燃え付きしが如く、殆ど止め度なしに饒舌りぬいて、丸く短かく盛り上りし膝を思はず乘り出せば、大喝一聲、この馬鹿女と叫ぶべき筈の川德、眉に八の字を寄せ兩眼を閉ぢて默然と思案の體、

雨か、風か、その首を横に振るか縱に下すかと、頻りに息を詰めて窺ふ下女、

川德の眉に寄せし八の字、そろ〳〵消えて薄くなり、固く結びし横一文字の口も次第に緩みかゝれば、これを窺うて瞬目もせず打戍りし下女、ほッと安心の滿面に溢るゝばかりの微笑、

「全くですよ川田さン、今もいふ通り、御病氣になるかも知れないほど、貴君の事を思ッて居らッしやるンですもの、それを何ともないとすれば貴君、いくら豪くッても、どンな理窟があッても、つまり人情に外れた方で、木か石と同じこッてすワ」

「いや、さう、いはれて見ると、すまないやうな氣もするがね」

「さういはれなくッても、すみませンよ」

「まァ濟む濟まないは偖置いて、どうだらうな、お孃さン一事、此方の依賴を聞いてくれまいか」

「あら、川田さン、くれまいかとは何です、くれまいかとは、もし運わるくお茶でも召上ッてる時、さういふ言葉を其まゝ正直に取次いで御覽なさい、ざぶりと頭上から浴せら

れますワ、ほゝゝゝ」

「どうも餘計な口が多くて困る、實はね、かういふ依頼だ」

「依頼といはないで、男らしく注文と仰しやい、もし貴君の御注文なら、お孃樣、どんな無理でも難題でも喜ンで、ほゝゝゝ」

「さう、いち〳〵文句を入れずに、まア乃公のいふ事を聞けよ、うるさい女だなア」

「おや、うるさう御坐いますか、これほど骨を折ッて蒼蠅いなンか、いはれては私、つまりません事」

「暫く默ッて居てくれ、つまり依頼といふのは、外でもない、壁一重この隣家に、そら先月、例の萬引一件で、お孃さンに呉服屋へ電話をかけて貰ッたらう、あれだよ、實際、見るに忍びない、達者で働いても、其日を無事に暮し兼ねる亭主は現在、自分の床さへ

這ひ出す事の出來ない長らくの腰ぬけ病人で、骨と皮に痩せ細ッた七歳の小兒は絶えず腹が空いて泣くしね、ろくに食ふものも食はないから母親の乳も出ないに吸ひ付いて離れぬ乳呑兒はあるし、その親子四人の生命を嚊ア一人が夜の目も寢ない麻繋ぎの手内職で、やう〳〵南京米の粥さへも、啜ッたり啜らなかッたりといふ哀れな境涯だ、あれを、どうか、お孃さンに救ッて戴きたい」

案に相違の下女、ぷッと面を膨らして呆れ顔、

「何ですの、川田さン、貴君の御依頼だと思ッたら、まア、いやだ事、あの萬引ですか」

「おい、さう萬引々々といふもンぢやアないよ、常習犯なら兎も角、親子四人の生命に迫ッた、つい一時の出來心だ、また世の中に貧乏人は澤山ある、その日を食へないものは隣家ばかりでない、ないがね、今にも飢死するやうな眼前に、おッ被さるやうな高い煉

瓦塀があッて、その中の奥深い大きい立派な屋敷に全體、どういふ人が住ンでる、安樂に寢て居ても金が殖えて行く人だらう、その人を親に持ッて外に同胞もない一粒種の其お孃さンへ、この川徳が折入ッてお賴み申すンだ、あの亭主は乃公が明日中に奔走して、きッと慈惠病院へ入れるが、あとに殘ッた嚊ァ、あれを救ッて戴きたい、幸ひ千坪もあるといふ廣いお庭だ、植木屋も絶えず二人づゝ這入ッてるさうだが、たとひ間に合はなくッても、隅々の草拐りか何か、目觸りにならない事で、日に二十錢か二十五錢ぐらゐ、ね、どうせ大家のこッたから定めて毎日の食ひ餘りもあるだらう、それを芥溜に捨てる氣で遣ッて貰やァ猶更ら地獄で佛だ、なァに譯はない、家に取ッて押へ手のない大事の大事の其お孃さンが只一言、かはいさうだといへば、すぐに出來るこッたよ、目の覺めるやうな當世美を競ッて公衆の前に花を賣ッたりなさるも宜いが、また人の知らない浮世の闇に埋もれた、あゝいふ哀れな見苦しいものを只一言で救ッて、おやりなさるのも慈善事業だと、さう取次いでくれ、いやなら嫌で宜いがね、この川徳、敬意を拂ッて一應お賴み申すンだ」

今日こそはと天晴れ手柄顔に押出せし下女、その身も輕く肩の荷を下す考へなりしが、案に相違の重荷を背負はされて、そッと人なき久子の部屋へ、實は面目なげに半謝罪の申譯、

「お孃樣、どう致しませう」

戀の神、近頃この久子に何を敎へしやら、おもはず顏を赤めて、四邊を見廻しつゝ擘を潛め、

「どうしたの」

「どうも貴孃、とんだ事を頼まれて、まゐりましたので、お孃樣に申譯が御坐いませン、第一あの人は、よほど變ッて居りますよ、自分の事は偖置いて、何をいふかと思へば、馬鹿々々しい、よけいな他人の事に氣を揉ンで、それを貴孃に取次いでくれと、私、全く困りましたの、實はね、お孃樣、かういふ事で御坐いますよ」

例の親子四人に付いて川德より持ち出されし一件を、猶更ら口數の多い言葉に委しく語りし後、

「まァ何といふ、おせッかいな、世話燒でせう、それも普通の人間なら兎も角、たとひ苦しまぎれに一時の出來心でも、汚らはしい、萬引したものを貴孃、お屋敷へ、いくら川田さんだッて、あンまりぢやァ御坐いませンか、もしあの人でなければ私、その場で直ぐに一本、まゐりたう御坐いましたよ、ヘン此方は監獄ぢやァありませンよと」

うか〳〵饒舌りながら、ふと久子の顏を見れば、俄の不機嫌、聊か横を向いて、優しい目に角、

「末、お前はね、萬事それだから、いけないよ、わからないンだもの」

「さやうで御坐いますか」

「何故お前、お禮を、いはなかッたの」

「おや、おや、おや〳〵、お禮を申しますンですか」

「考へて御覽、それが、あの方の、立派なところで、少しも世間の事を知らない、わたしに、善い事を敎へて下さるンだよ、その女を使ッてあげると、この家は監獄になるのかね」

「あら、お孃樣、とンでもない」
「だッて今、さう、いうたぢやないか」
「いゝえ、決して、さうは申しませンよ、口へ出さずに只、その時の心持を、ちよいと」
「口へ出さないだけ、お前は猶更ら惡いよ、ちよいとでも、失禮だワ」
「困りますねエ、お孃樣には、いち〳〵お小言を頂戴したり、また彼方では怒られたり」
「わたしは、どうでも宜いが、お前、あの方に怒られるやうな事をするの」
「かうなると末も、かはいさうで御坐いますよ、どちらか一方で助けて戴かないと、絶えず兩責めに逢うて痩せるやうな氣が致します、ほゝゝゝ」
「少しは痩せた方が宜いよ」
「まァお孃樣、酷い事、この樣子では此方よりも却ッて、手嚴しう御坐いますね」

「御免よ、ほゝゝゝ」

日曜の明けの朝、もはや時間に迫りて、慌てながら職工服を身に纏ひし白馬と痣長、
「日曜の前の晩と明けの朝は、わづか一日のこッて大變に心持の變るもンだなァ、また食ふための生命繫ぎに出るかと思へば、うンざりするが、お互に年が年中、同じ事ばかり繰り返して、いつ浮ばれるだらう、生涯このまゝの沈みッきりぢやァ少々、なさけないね」
「生涯の事なンか考へるな、一週間に一度づゝ浮べば宜いとするさ、現に昨日は淺草で浮いたぢやァないか、はゝゝゝ」
「まァ、さうでも諦めて、また出るとするか、はゝゝゝ」

二人もろとも等しく川徳を見返りて、
「今朝ァ大變、ゆッくりだな、そろ〳〵もう時間だせ」
「早くしないな、待ッてるから」
川徳は朝飯に殘りし番茶を引き寄せて悠々と飲みながら」
「いや、今日は、ちよいと用があるから休まう」
痣長まづ小首を捻りて、のッぺりの白馬これに相槌を打ち、
「休む、きのふの今日また休むとは、どンな用だ、怪しいぞ、よけいな世話だが、氣にかゝるなァ白馬」
「全くだ、風の吹く晩に火の用心を忘れて出るより氣がゝりだ」
「病氣でも何でもないに、をかしいよ、二人とも出して置いて」

「あとで一人、何をするか知れないぜ」
川徳、笑ひながら額越に見上げて、
「君等二人が居ても居なくッても、する事に遠慮する乃公ぢやァないからな、安心して出ろ、留守中、もし好い事があれば取ッて置いてやるよ、はゝゝゝ」
二人の奴、まだ出もせず、ぐづ〳〵しながら、
「ねエおい、例のカステラか羊羹で、取ッて置けるもンなら宜いが、そッと來て、そッと出るものァ取ッて置けないぜ」
「生きもンの出入りは自由だからな、あとに證據が殘らないよ」
「しかし目前で見せられるのも辛いぜ」
「見れば辛くッて、見なければ氣にかゝるといふ場合だ、困ッたなァ」

うるさく悪洒落に口ばかり達者な奴、あまりの面倒さに聊か言葉の尖りし川徳、

「おい〳〵馬鹿にも冗談にも程度があるぞ、休むだけの用があるから休むンだ、貴様等に日給を貰ッてるかい、それほど氣にかゝりやァ二人とも門口で立番しろッ」

實は好人物、二の句も次げず其まゝ吐鳴り出されて、互に顔を見合はせながら横町の辻まで行けば、そこに立てる一人の女、

くッきりと色白に冴え渡る目鼻立、年は十八九、もし杉浦家の久子を現代式の令嬢美に遺憾なきものとすれば、これは江戸風の餘波をうけて半襟式の水際立ちし娘、道に迷ひしか、歩を停めながら、幸ひ來かゝる二人に小腰を屈め、

「ちよいと伺ひますが、あのウ、この邊に大きい煉瓦塀で引き廻した立派な、お屋敷は御坐いますまいか、それさへ承れば、すぐ其お向ふだと聞きましたので」

きくや否、何を感じたか二人の奴、不意に息でも詰ッたやうに目を剝いて半泣きの面、半泣きの面を朝風に吹かして、其まゝ取ッて返せし痣長、門口より蝗の如く飛び込むや否、

「さァ川徳、承知しないぞ、どうも變だと思ッたよ、大い野郎だ、少しは遠慮しろ、彼方にも此方にも大變なものを出來しやァがッて」

あまりの不意に川徳も呆れ顔、

「狼狽へて何だ此奴だしぬけに、途中から」

「これが狼狽へずに、あのまゝ眞ッ直ぐ歩いて行けるかい、今そこへ來るンだ、畜生、今そこへ白馬が連れて來るンだぞ、もし留守中に好い事があれば取ッて置くなンか、よく吐した、人を馬鹿にしやァがッて、あれを取ッて置かれて堪るかい」

門口に近づきし白馬、のッりぺとした長い面を後の方へ捻ぢ向けて、
「こゝです、こゝに居りますよ、まアお這入りなさい、おい痣長、先觸したかね」
「してる最中だ」
「川徳、お客様だぜ、案内して來たよ」
川徳、ふしぎの眉を顰めて門口を見れば、白馬の背後に差俯いて立てる姿、今更ら顔を赤めて入り兼ねたる風情、
流石の川徳も驚いて暫しの無言、その左右より我を忘れて妙な面をしながら、何をいふかと窺ふ二人の奴、門口には動きも得せず其まゝの立往生、
「出かけた途中で、とンだ手數をかけたね、ありやァ元、この乃公が神田の錦町で二階を借りて居た佐藤といふ家の娘さンだよ、お絹さン、どうして分りましたね、どうして來ました、久しぶりですな、さア此方へ、かまひませン、こりやァ同じ鍋のものを食ッてる友達ですよ、はゝゝゝ」
わざ〳〵立ッて迎へねど、言葉に優しく笑へば、ほッと安心せし色は見えながら、まだ其まゝ家へは入らず、まッ白の額際、黒漆の如き前髪、やゝ伏目勝に門口より小腰を屈め、
「御機嫌、よろしう御坐います、實は、あの弟が、三四日以前、こゝを通りまして、貴君を、お見かけ申したさうで」
「はゝァ、それで、わかッたンですな、いや大變に御無沙汰しました、お父さン、お達者ですか、兎も角お這入りなさい、そこに立ッたまゝぢやァ」
「いゝえ、また伺ひます、今日は、阪本町まで、用事が御坐いまして」
むしや〳〵癪に觸れど、見ても居られぬ痣長、